

第2章 京都大学本部構内 AU30区・AV30 区の発掘調査

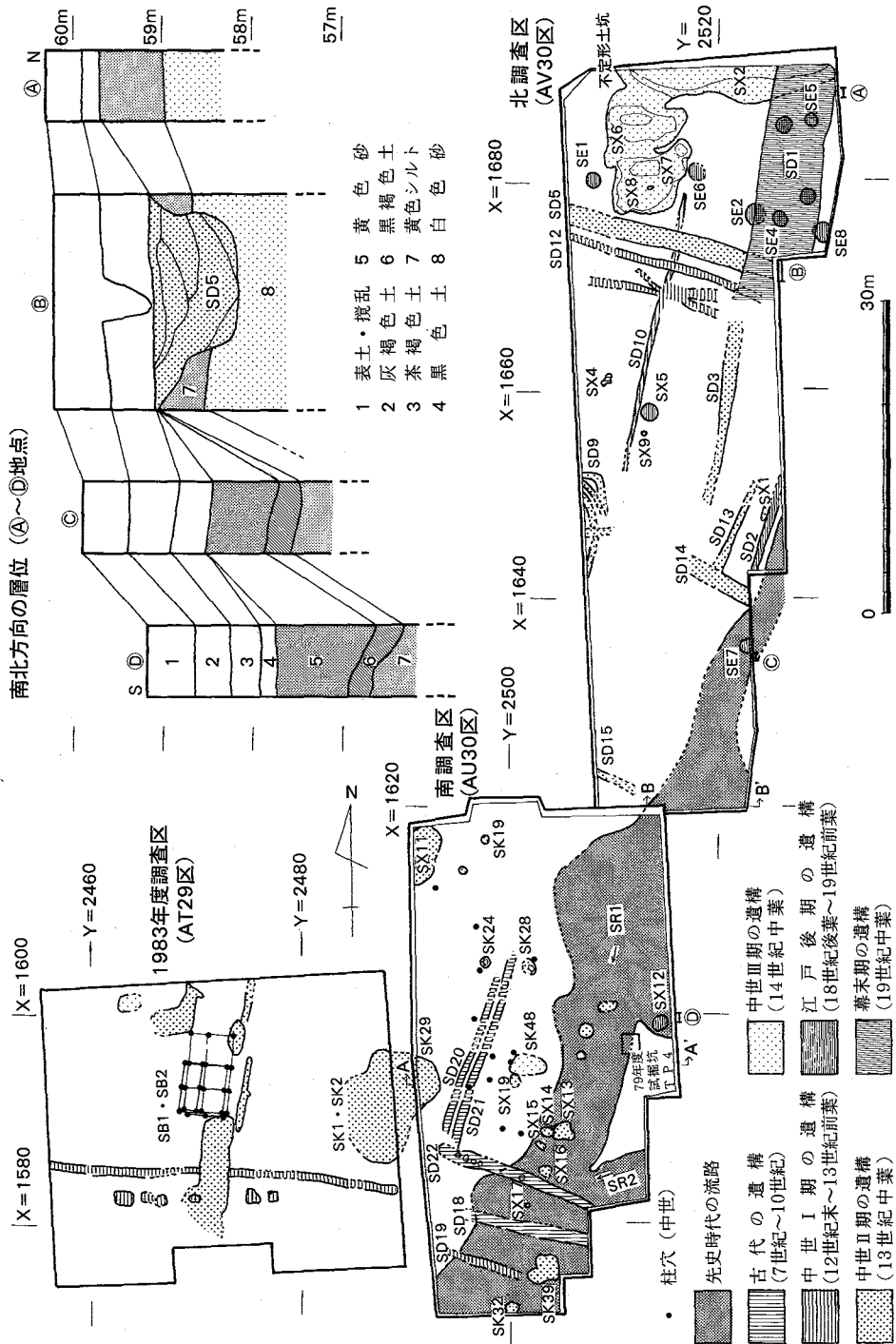
千葉 豊 伊藤淳史 古賀秀策

1 調査の概要

本調査区は、本部構内の東南隅に位置する。周辺では、1979年度の試掘調査で縄文晩期～弥生前期と中世の遺物包含層が、1981年度の立合調査で中世の土器溜や土坑が、それぞれ報告されている〔京大埋文研80・83〕。さらに、西に隣接するAT29区（図版1-124地点）の発掘調査では、中世の溝や掘立柱建物跡などがみつまっている〔泉・飛野86〕。こうした状況のなかで、ここに工学部機械工学科等研究実験棟ならびに工学部RI施設棟の建設が計画されたため、事前にそれぞれ発掘調査を実施した。2つの調査区は南北に隣接しているため、前者のAV30区（214地点）を北調査区、後者のAU30区（219地点）を南調査区と呼び、本章であわせて報告する。北調査区の1480 m²は、千葉豊・伊藤淳史が担当して1993年1月11日～2月26日に、また南調査区1074 m²は、伊藤・古賀秀策が担当して1993年10月18日～1994年1月14日に調査を実施した。調査区の位置関係と主要な遺構は、AT29区の成果と合わせて図1にまとめて表示している。

調査の結果、北調査区の南半は攪乱が著しかったが、それ以外では縄文時代以降近世に至るまでの各期の多様な遺構がみつかり、総計整理箱65箱分の遺物が出土した。なかでも、南調査区を北東から南西へはしる流路から、突帯文土器と遠賀川式土器がまとまって出土したことは注目され、1979年度の試掘調査で確認されていた遺物包含層が、流路に伴う局地的なものであることが判明した。それ以外には、平安時代以降の各時期の溝、中世の土器溜や柱穴群、砂取り穴などがみつまっているが、溝の多くは方位を東に振り、土器溜は流路埋積後の上面に、柱穴群はその西側の安定した地盤に集中する傾向がみられるなど、古代以降の土地利用が先史時代の地形環境に由来する制約のもとに変遷していく状況を知ることができた。なお、遺構からではないが、縄文時代草創期～早期に比定される有茎尖頭器の出土も特筆される。

出土遺物の整理は発掘調査に引き続きそれぞれ担当者がおこない、本章はその結果にもとづき、第6節を千葉、第5節(1)を古賀、それ以外を伊藤が分担して執筆しまとめたものである。発掘と整理に際しては、矢野由記子・下坂澄子・富井眞・国師祥史・大岡由記子・宮本康二の助力を得た。



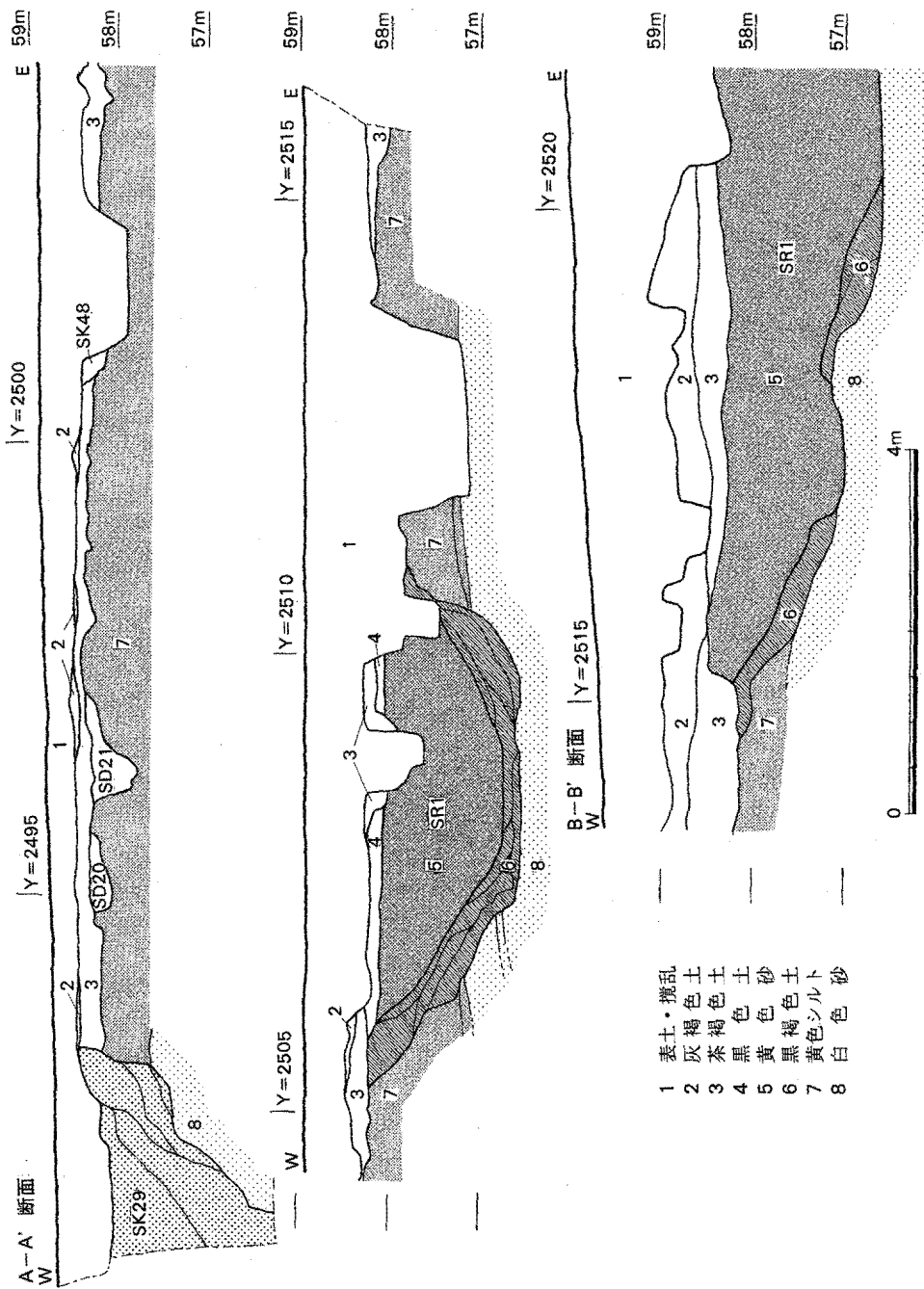


図2 東西方向の層位 (図1A-A'・B-B'地点) 縮尺1/80

2 層 位

調査区の現地地形は、全体としては北から南へゆるやかに傾斜しており、北調査区の北端と南調査区の南端での比高差は1m ならずである。南北方向の層位については調査区東壁の要所の4ヶ所 (㊤～㊤地点) を表示し、東西方向については、南調査区の東西畦南壁 (A-A' 断面) と、北調査区の南壁 (B-B' 断面) を裏表反転して図化したものの記録を示す (図1・2)。

第1層の表土・攪乱は、大学設置以降の近～現代にかかわるものであり、それより下層を調査対象とした。

第2層の灰褐色土は、近世の遺物包含層で、18～19世紀代の陶磁器類が多く出土する。南調査区では上面を削平されており、部分的にしか残っていなかった。

第3層の茶褐色土は、中世の遺物包含層で、13世紀代を中心に、12世紀代にさかのぼるものや14世紀以降に下るものも少量認められる。北調査区の北半ではほとんど残っておらず、遺構の埋土としてのみ確認できる。

第4層の黒色土は、南調査区の東半において、下層の流路 (図1 梨地部分) とほぼ一致する範囲に認められたもので、やや粘質の堅く締まった層である。10世紀代の遺物がごく微量出土している。また、SD18・SD20・SD21の埋土も、これと同質なものである。本来はもっと面的に広がっていたものが、下層の流路の影響で生じていた凹地や遺構の掘り込み部分への堆積を除いて、削平されてしまっている可能性が高い。

第5層の黄色砂は、流路を埋没させている均質で粒子の細かい砂層で、無遺物。吉田キャンパス一帯で鍵層として確認されている、弥生前期末～中期初頭ごろの土石流堆積層に相当するものと判断している。

第6層の黒褐色土は、流路の底面に沿ってU字状に堆積しているやや粘質の土壌で、地点によっては縄文晩期～弥生前期の遺物を多く含む。これら流路内の堆積状況については次節で詳述する。

第7層の黄色シルトは、調査区の遺構のベースとなっているもので、色調は黄色砂に類似するが、堅く締まっている。約0.6～1.0m あまりの厚さがあり、その下には第8層の礫混りの白色砂層が堆積していることを確認している。第7層・第8層ともに無遺物であり、場所によっては両層の間に淡褐色砂質土の薄い間層が認められる。いずれも、縄文後期以前に堆積した層であろう。

3 縄文・弥生時代の遺跡

(1) 流 路 (図版4・5, 図1～3)

この時代にかかわる遺構は、北調査区の南東隅をかすめ、南調査区を北東から南西方向へはしる流路SR1を中心とする。位置と断面の様子は図1・図2を参照されたい。また、南調査区については、流路内に堆積していた黒褐色土層上面の地形と、層内の主要遺物の分布状況を図3に示した。流路を埋没させている黄色砂層が弥生前期末～中期初頭に限定できる堆積であることから、ここに示した地形は、流路埋没直前の自然地形を表わすものである。以下、流路の内容について詳しく説明する。

規模と形状 SR1は、平均すると幅6m深さ2mあまりで、断面はU字形を呈する。ただし、両側の立ち上がりが確認できるのは一部のみで、東肩は不明な部分が多い。また、このように東肩が欠落している地点では、それに対応して西側へと流路の幅が大きくふくらむ状態を示している。調査区外となるため断定はできないが、東方の吉田山からこの流路へと合流してくる流路が複数存在しており、その影響によるものと推測される。南調査区の南端では、こうして東から合流してきた流路SR2が、SR1と並行して南流し、調査区外へのはびていく。以上の状況から、いずれの流路も自然流路と判断している。

堆積状況 流路は、第7層の黄色シルト層を切って流れており、その底は第8層の白

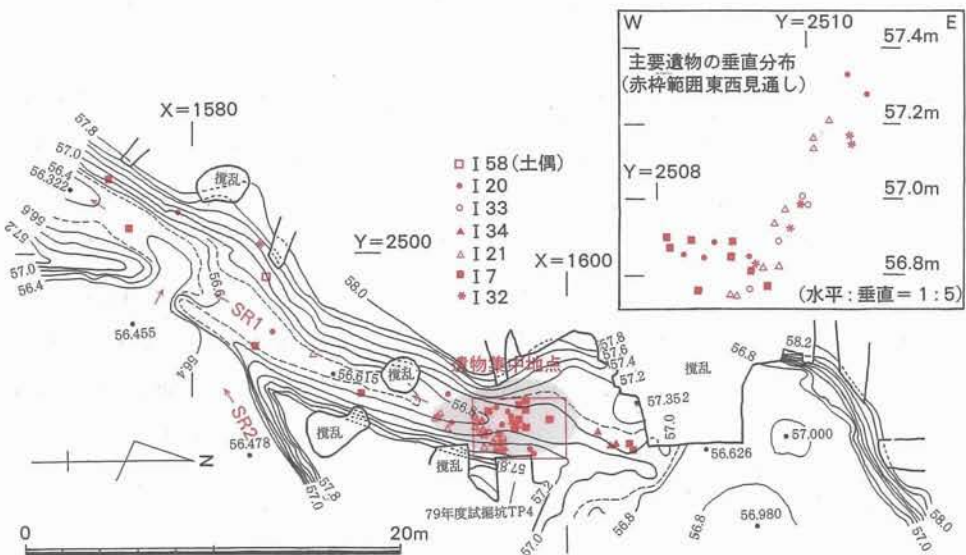


図3 流路内黒褐色土層上面の地形と主要遺物の分布 (等高線の間隔 20m) 縮尺 1/400

色砂の中位に及んでいる。内部には、第6層の黒褐色土層が、基本的に底面に沿ってU字状に堆積しているが、地点によっては流路の西肩のみにブロック状に存在する。それより上面は第5層の黄色砂が厚く埋積し、流路を埋没させているけれども、古代以降も凹地として残ったようで、最上面に第4層の黒色土の堆積をみる。黒褐色土層は、1979年度の試掘調査の際には、黄色砂より下層の暗茶褐色土・暗褐色土・黒色土の3層として報告されている〔京大埋文研80 p. 40〕。今回の調査においても同様な色調の違いは認められたが、その境界は漸移的で安定したものではないこと、色調以外には質的な差異がほとんど認められないこと、また遺物はいずれの層からも出土し接合関係も認められることから、黒褐色土層として一括した。また、この層内には、水流や滞水の状態が存在したことを示すような間層は全く確認されなかった。

遺物出土状況 黒褐色土層中からは、弥生前期の土器を中心に総計446点の遺物を取りあげた。すべて南調査区の出土で、流路幅が最も狭くなっている付近の、それも東側斜面を中心にまとまって出土している（図3 梨地部分）。この遺物集中地点の下流にあたる南方や、斜面や層の上下間においても接合関係にある破片は多く、ここでは、代表例として主要な7個体の破片の水平分布と垂直分布を表示しておく。土器片はいずれも磨滅していないことから、これらは、原位置を保ってはいないものの、流路の東～東北側を中心とする調査地点にきわめて近い場所から、長期的ではなく比較的短期間にまとめて廃棄されたものである可能性が高いと判断される。

(2) 遺 物 (図版6～10, 図4～9)

土器・土製品については、すべてSR1内黒褐色土層の出土である。説明の便宜上、遠賀川式土器・突帯文土器・その他、の3群に大別して報告する。内容の検討は第6節で再述しているので参照されたい。なお、石器については、黒褐色土層中からは5点の剥片が出土したのみである。よって、古代以降の遺構に混入して出土したものを提示する。

遠賀川式土器 (I1～I31・I42～I49) I1～I9は壺。I1～I4は口縁部の破片で、I1は口縁端部を丸く収め、焼成後穿孔の紐孔をもつ。頸部には断面半円形の突帯を貼り付けている。胎土中に角閃石を多く含んで暗褐色の色調を呈し、一般に「生駒西麓産」と呼ばれている胎土の特徴を示している。I2～I4の端部は弱く面取りしている。I3は頸部の沈線が1条まで確認できる。I5～I9は頸～胴部の破片で、I5は頸部に削り出し突帯を設けその上に沈線が1条まで確認でき、焼成後穿孔の紐孔をもつ。また、外面には刷毛目調整が消されず残っている。I6はやや特異なもので、内外面を丁寧に研磨

して黒色を呈し、頸部に装飾をもたない。I 7は頸部に2条の突帯を貼り付け、胴部には沈線3条と突帯1条をめぐらす。胴部沈線の最上端のものは、頸部側を横位方向に強く研磨して低め、削り出し突带状の段差を成形する。貼付突帯は断面半円形で、正面から^{はりつけ} 鋭先によるV字形の刻みを施している。胴部の突帯はかなりの部分が剥落しているけれども、その部分から、突帯貼り付け前に下書きの鋭描沈線が施されていたことが確認できる。I 8は、かなり大形になる壺の頸部で2条の鋭描沈線をもつ。接合はしないが同一と思われる破片は多数ある。I 9は小形の壺の頸部で、沈線が3条まで確認できる。

I 10・I 11は壺用の蓋。I 10には中央部に焼成後穿孔の紐孔がある。

I 12～I 14は鉢。I 14は、器表面を横位方向に研磨したのち、上下方向より指で押さえつけて成形したおおぶりの把手を貼り付けている。その後に胴部を再び研磨するようである。1/8程度しか残存していないので把手の単位は不明であるが、図上では4方向に把手がつくものとして復原した。なお、I 13・I 14は外面に煤が付着している。

I 15～I 31は甕。口径が復原可能なものでみると、直径18 cm程度のもの(I 16)、22～24 cm程度のもの(I 17～I 19・I 21)、30 cmを越えるもの(I 15・I 20)の少なくとも3種類の法量が認められる。器形としては、口縁が短く外反し、胴部はあまり張らないものが主体となるが、I 19はやや強く張るものとみられる。調整は、外面を縦位の刷毛目調整、内面を指や板状工具で撫でて平滑にすることを基本としているが、I 19は口縁部の内面にも横位方向の刷毛目が残される。I 15では、1.5 cm程度の幅をもつ板状工具の木口や擦過の痕跡が良く観察できる。装飾は、口縁の端部に刻み目を、頸部に鋭描沈線を施すことを基本とする。I 15・I 16は頸部の文様を欠いているが、それ以外の個体では、残存している範囲内で、1～3条までの条数が確認できる。I 18・I 19の刻み目には木目の圧痕が明瞭に残っているほか、I 20には、口縁端部の下端を鋭くV字に刻む特異な技法を用いている。類似の刻み技法は、病院構内AH19区出土土器I 83として報告されているものにみられる〔千葉91 p. 37〕。I 21は、外面の下半部が強い火熱を受けて黒変し、器表面が剥落している。しかし内面にはとりたてて使用にかかわる痕跡は残っていない。これ以外の甕も、外面に煤が付着しているものは多いが、内面に付着物が残っているものはない。

I 42～I 49は底部。外面を丁寧に磨いているI 42～I 45は壺の、刷毛目調整であるI 46・I 49は甕の底部であろう。I 47・I 48は小片であっていずれとも決めがたい。

突帯文土器 (I 32・I 33・I 39～I 41) 口縁部を含む個体はI 32・I 33の2点のみしか出土していない。I 32は、やや胴部の張る深鉢で、底部を除いてほぼ器形が復原でき

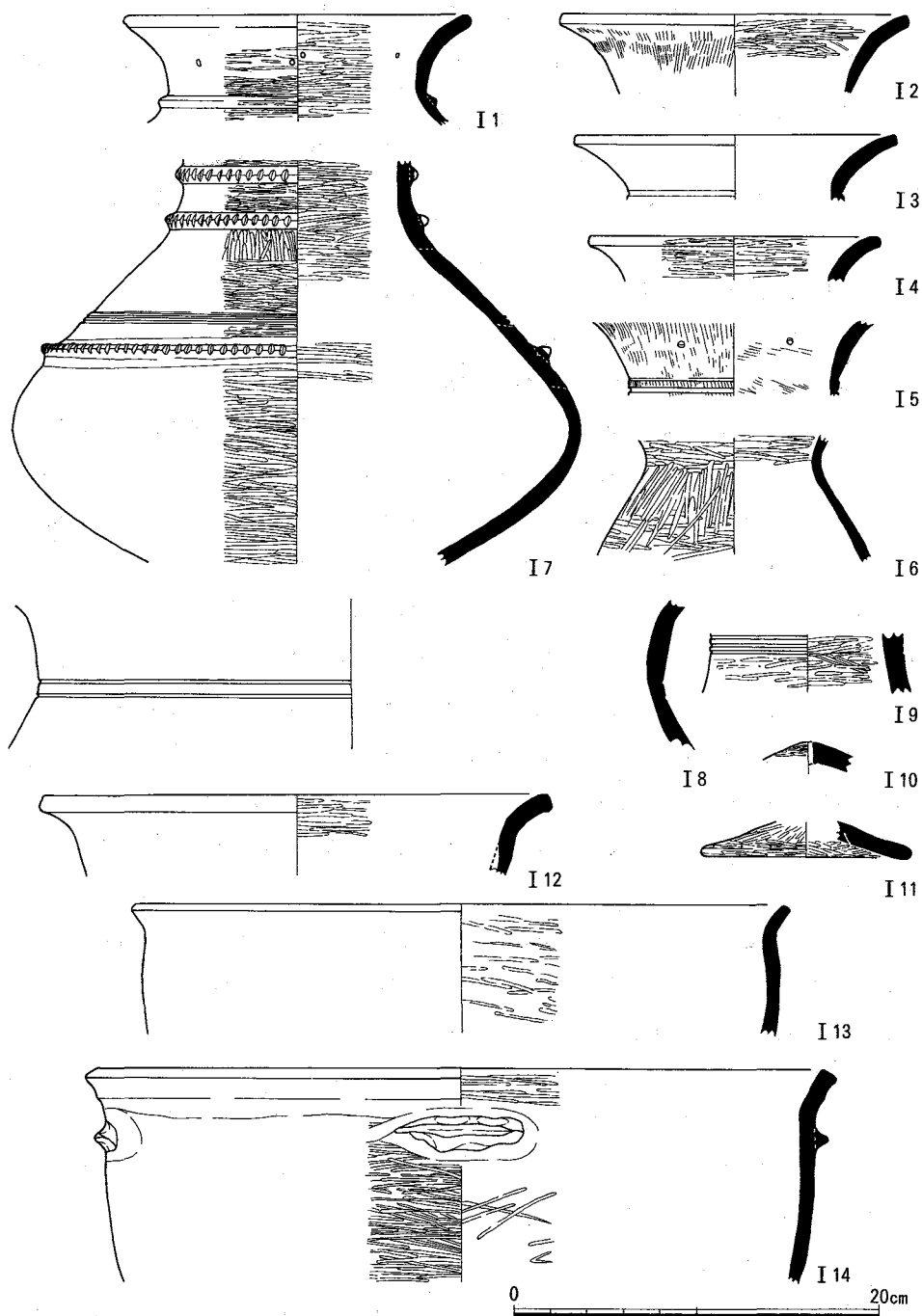


図4 SR1 黒褐色土層出土遺物(1) (I1～I14) 縮尺 1/4

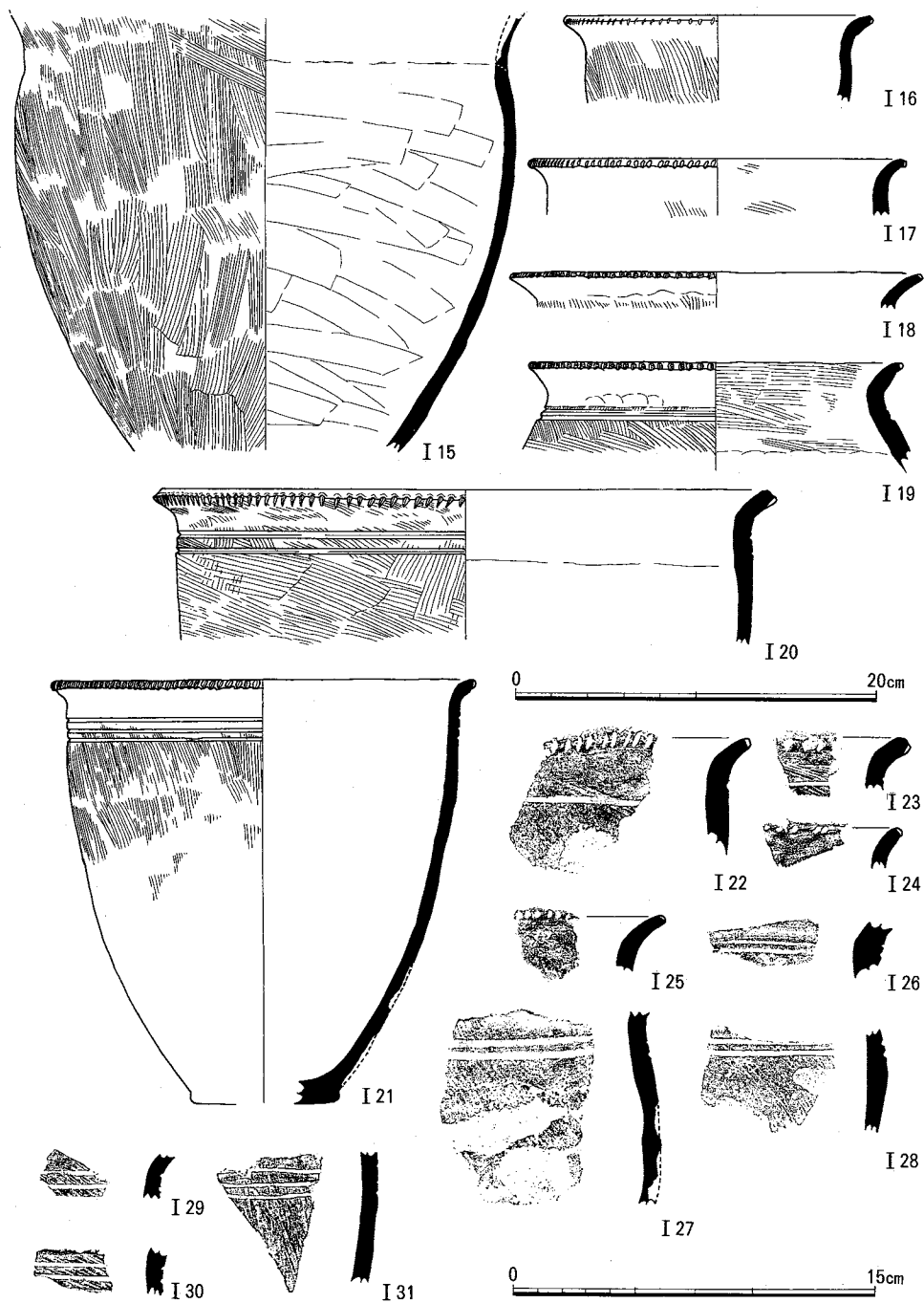


図5 SR1 黒褐色土層出土遺物(2) (I 15~I 31) I 15~I 21 縮尺 1/4, I 22~I 31 縮尺 1/3

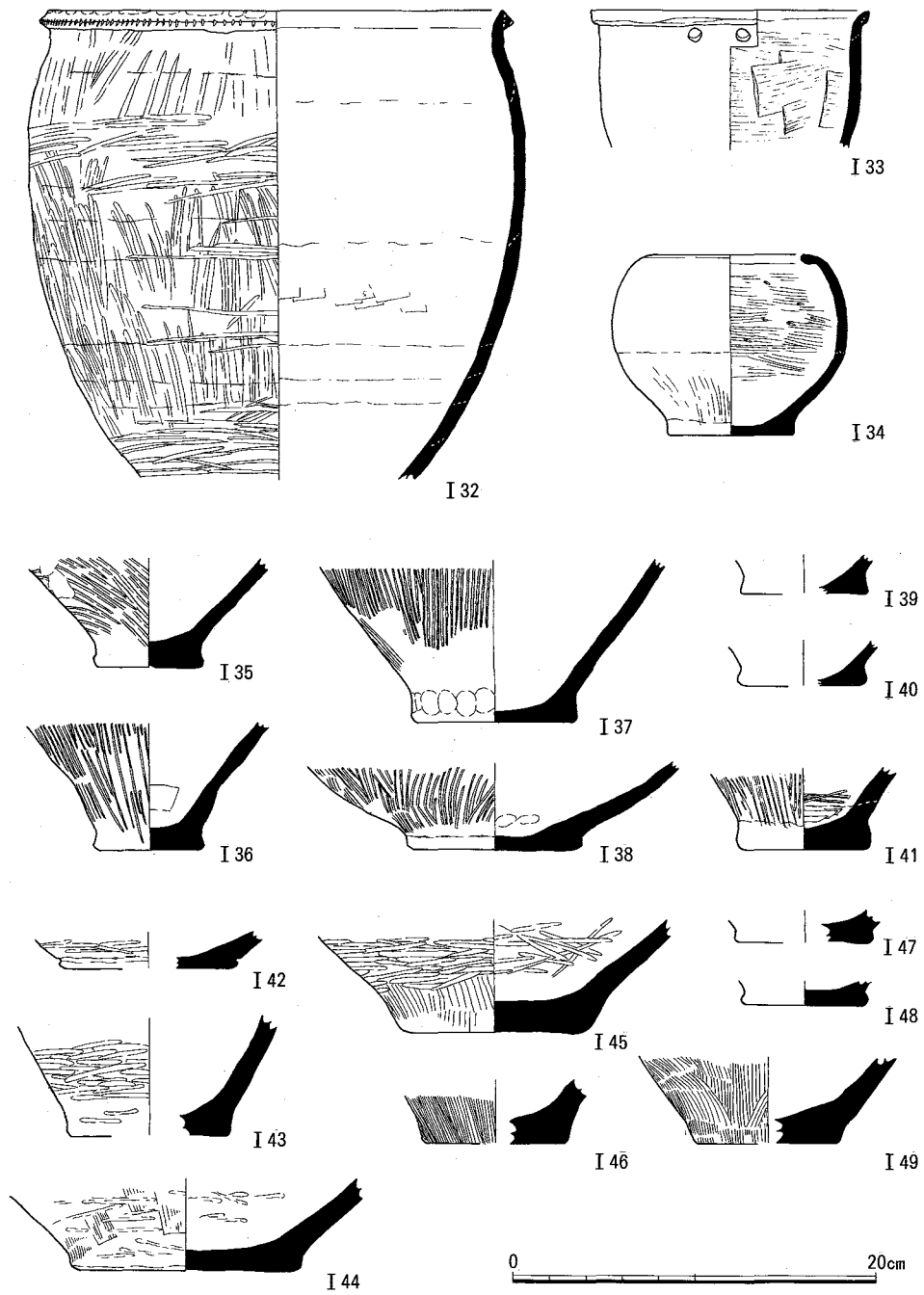


図6 SR1 黒褐色土層出土遺物(3) (I 32~I 49) 縮尺 1/4

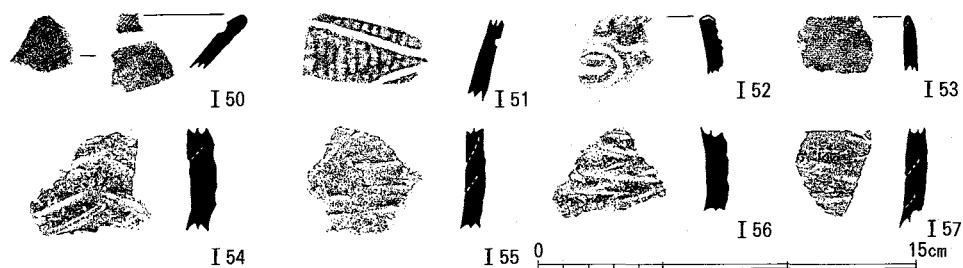


図7 SR1 黒褐色土層出土遺物(4) (I 50~I 57) 縮尺 1/3

る。1979年度の試掘坑 TP4 第4層出土の口縁部破片Ⅲ26と接合した〔京大埋文研80 p. 40〕。口縁端部は、断面三角形の突帯貼り付けを兼ねた撫で調整で処理されており、突帯上には非常に細かなD字形の刻みが施される。外面には、縦位方向を基本としながら、肩部を中心に一部に横位方向のものを加えた、幅3mm程度の篋磨き状の調整が施されている。ただし、部位によっては2~3条単位の細密な条痕状を呈していることから、使用された工具の本来の形状をうかがうことができる(図版10-1)。色調は、明黄灰色を呈し、外面の一部には煤が付着している。I 33は小形の深鉢で、口縁端部に沿って偏平につぶれた紐状の突帯を貼り付けているが、形状が安定せず、突帯がめぐっていないかのように見える部位もある。口縁下に径7mmの補修孔が穿たれている。外面は横位の撫で調整を基本とし、器面は平滑だが板状工具の木口の圧痕がのこる。内面には、横位方向に板状工具をひきずった痕跡が粗く残されている。色調は暗黄灰色を呈し、外面には煤が付着する。I 39~I 41はこうした突帯文土器の底部とみなせるものである。このうちI 41は、色調や胎土の特徴にI 32と近いものがあり、同一個体となる可能性もある。

その他 (I 34・I 35~I 38・I 50~I 57) I 34は、小形の無頸壺。口縁は内側へ水平に屈曲し、端部は撫でて丸く収められている。外面の調整は、下半部に刷毛目状の条線がわずかに残っているが、それ以外は風化してはっきりしない。器表面は平滑である。内面には、横位方向の砂粒の動きが多数認められるとともに、刷毛目状の条線も粗く残されている。色調は淡黄白色を呈する。無頸壺は、遠賀川式土器には稀にみられるが、このように口縁が内折する器形はみられない。また、本例の胎土や色調は、遠賀川式土器に一般的なものとも異なっており、系譜については検討を要する。

I 35~I 38の底部と、I 54~I 57の破片は、外面を条痕状に調整している。I 35は、底部側から見て反時計回りの螺旋状に、櫛状工具を用いた条痕を施す(図版8)。色調は黄褐色。I 36・I 37の縦位の条痕は、3mm幅程度の凹部と細い凸部が並行しているもので、

割板状の工具によるものと思われるが、図版10で示すように、遠賀川式土器の刷毛目とは明らかに異なっている。ともに内面には板状工具の擦過痕が明瞭に残る。色調は淡黄白色。I 38は、先太の櫛状工具による条痕を縦位に施している。色調は淡黄白色。I 54～I 57は、櫛状工具による羽状の条痕がみられる破片で、器壁が厚く、外面は火熱を受けて赤褐色に変色している。特徴が類似しているので同一個体の可能性もある。これらは、いずれも近畿地方の突帯文土器にはみられない特徴であり、I 35は伊勢湾地方からの搬入品、I 54～I 57もその可能性がある。I 36～I 38は、伊勢湾地方に見られる条痕調整とも趣が異なり、類例をみないものである。

I 50～I 53は、縄文後期を中心とする時期の土器とみられるが、いずれも磨滅気味の小平片であるため、細かな型式は特定しがたい。I 50は口縁部で、内面に幅広の沈線に区画された節の非常に細かな縄文帯をもつ。I 51はかなり磨滅しているが、縄文を地文とした上に篋描の弧状文様を施すようである。I 52は口縁部で、口唇部を篋で刻み、その下は同心円文風の沈線文様を描いているようである。胎土中に角閃石を多く含む。I 53は、先端を丸く納めた口縁部の小破片であり、晩期の土器である可能性もある。

土 偶 (I 58) 中実の棒状の土製品で、ほぼ直角に屈曲した部分の破片。土偶の肩ないしは腰の部分かと推測される。砂粒をあまり含まない比較的精良な胎土で、黄褐色を呈する。図面上で上にした割れ口は面積が大きく、より大きな部分との接着が想定できるのに対し、下にした割れ口は小さく、細くすばまっていく傾向がうかがわれる。外面は丁寧に撫でて、わずかに面を成すような仕上げ方をされている。割れ口はどちらも単純な破損面で、製作時に離脱を意識したような特別な痕跡は認められない。流路内の黒褐色土層中からの出土であるので、縄文晩期末～弥生前期のものである可能性が高い。周辺における同様な時期の土偶の出土例は、中京区高倉宮下層遺跡で脚部片〔南88 p.100〕、長岡京市雲宮遺跡L235地点で頭部片〔長岡京市編91 p.77〕がある。

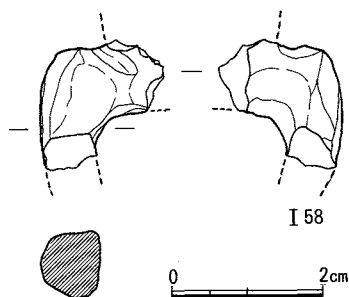


図8 SR1 黒褐色土層出土遺物(5) (I 58) 縮尺 1/4

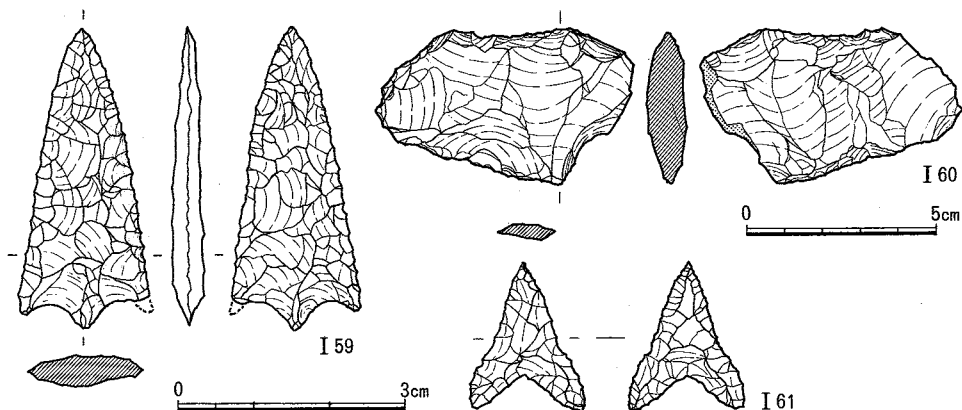


図9 石器 I 59・I 61 縮尺 1/1, I 60 縮尺 1/2

石器 (I 59～I 61) SR1 内の黒褐色土からは、サヌカイトの剥片5点が出土したのみで、製品はない。以下はいずれも、上層の歴史時代以降の遺構からの出土品で、縄文時代に属するものである。

I 59は、短い茎をもつ凹基有茎式の尖頭器。古代の溝 SD21 の埋土中から出土した。淡緑色のチャート製で、全長 4.05 cm、最大幅 1.75 cm、重さ 2.70 g を測る。有茎尖頭器としては最も小さな部類に位置づけられるものである。片側の逆刺の先端がわずかに欠失しているほかは完存しており、磨滅もほとんどない。体部の成形技法には、この種の石器に特徴的な、連続する押圧の斜行剥離があまり認められないものの、側縁を両面からの微細な連続調整で非常に丁寧に仕上げている。この有茎尖頭器は、比叡山西南麓では初例となるが、西口陽一の集成と研究によれば、京都市域では7点の出土が挙げられており、近畿地方においては縄文時代早期前半神宮寺式期までの土器とともに出土した例があるとされる〔西口陽91〕。最も近い位置にある早期の遺跡としては、調査地の北東約 1 km にある北白川上終町遺跡があり、黄鳥式期の住居跡などがみつまっている〔網94〕。しかしながら、それより古い段階の資料は周辺一帯も含めて確認されていない。出土の状況から本例の帰属時期は定かにできないけれども、北白川の縄文遺跡群においては現状で最古段階に位置づけられる資料と推測され、近接した場所での遺跡の存在を示唆する貴重な事例といえよう。

I 60は、スクレイパー、ないしは横形の石匙の未製品かともみられるもので、近世の溝 SD2 の埋土から出土している。漆黒色の頁岩製で、やや磨滅している。重さ 33.8 g を測る。I 61は凹基式の石鏃。近世の集石 SX5 から出土している。暗赤色のチャート製で、重さ 0.5 g を測る。非常に薄手で小さな製品である。

4 古代の遺跡

(1) 遺 構 (図版 2・4, 図 1)

北調査区で土坑が、南調査区で溝が見つかった。しかし、密度は非常に薄い。

SX4 は、北調査区で唯一確認できた古代の遺構で、細長い土坑の中央部を円形に掘りくぼめてあり、6 世紀後葉ごろの完形の甕 (I 62) が逆位で出土している。ほかに同時期の遺構はみつからない。

SD18 は、幅 1.2 m、深さ 30 cm 程度の浅い溝。9～10 世紀ごろの遺物が微量出土している。

SD20～22 は、幅 80 cm、深さ 40～50 cm 程度の、断面 U 字形の溝。南北方向に並行してはしる溝 SD21・SD22 は、東西方向の SD20 と直交しているが、相互の切り合い関係は攪乱のため不明である。また SD20 は、溝底に円形の掘り込みが連続して確認されたほか、調査区西壁付近で途切れており、西へは続かない。すべて方位は真北から 10° 前後東へ振っていることが注意される。いずれも遺物の出土は非常に乏しいが、埋土となっている黒色土層が 10 世紀前葉ごろの遺物を含むことから、それ以前の時期の溝と判断される。

(2) 遺 物 (図版 11, 図 10)

上述した各遺構からのほか、中世～近世の遺構や包含層に混入して、6～12 世紀にかけての各時期の遺物がわずかに出土しており、あわせてここで報告する。

I 62 は SX4 出土の土師器甕。球形の胴部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部をもち、端部には横撫でによる凹線が生じている。外面の上半と内面の下半には煤や黒色物の付着が認められる。胴部外面の下半は篋削り調整して仕上げており、小笠原好彦のいう「近江型」の特徴を示す〔小笠原 80〕。このような地域的特徴は、6 世紀後葉には生じて 8 世紀前葉まで継続することが知られ〔西口 寿 83〕、単独で出土した本例からは時期を限定しがたいが、調査区内ではほかに 8 世紀代の遺物は全く出土しておらず、一方、6 世紀末葉～7 世紀の須恵器蓋 (I 63)・杯 (I 64) が近接した SD1・SD5 にそれぞれ混入して出土していることから、本例もそれと同時期ごろの可能性が高いと判断する。

I 65 は茶褐色土より出土した須恵器短頸壺。胴部に櫛描波状文がめぐる。古墳時代にさかのぼる可能性もあるが、類例に乏しく、時期は特定しがたい。

I 66～I 69 は SD18 からの出土遺物で、I 66 は須恵器杯 A、I 67 は灰釉陶器、I 68 は緑釉陶器、I 69 は糸切痕をもつ白色土器の底部。I 70・I 74 は黒褐色土からの出土遺物で、I 70 は「て」の字状口縁をもつ土師器皿。器壁は非常に薄い。I 74 は削り出し高台の白色

古代の遺跡

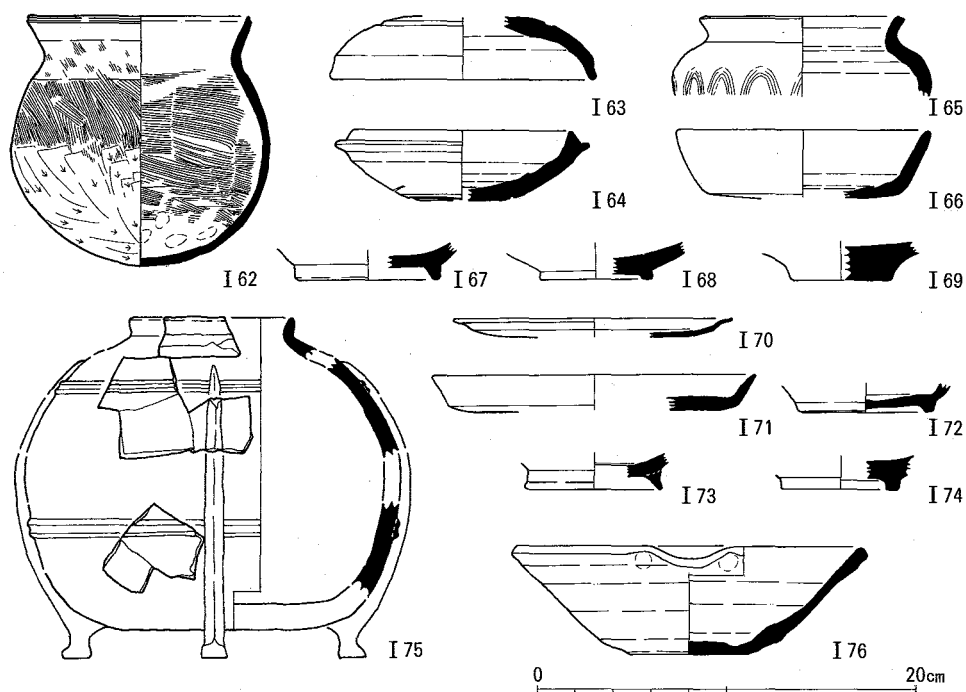


図10 古代の遺物（I 62・I 70 土師器，I 63～I 66・I 71・I 72・I 76 須恵器，I 67 灰釉陶器，I 68・I 73・I 75 緑釉陶器，I 69・I 74 白色土器）

土器底部。I 71～I 73は中世の遺構や茶褐色土への混入品で，I 71は須恵器皿，I 72は須恵器杯B底部，I 73は貼付高台をもつ緑釉陶器底部。以上は9～10世紀代に比定され，量的には少ないものの，この時期における調査区周辺での活動の痕跡を示すものである。

I 75は，黒色土と茶褐色土の双方から出土した同一個体と推定される緑釉陶器の破片から，四足壺の器形を復原した。灰色の精良な胎土で，焼成は堅緻。釉調は淡緑色で外面は丁寧に磨かれている。特徴からみて猿投窯の製品と判断される。緑釉陶器の類品は，京都市上京区慈照院に，織田有楽斎の所持として伝世される重要文化財の四足壺がある〔東京国立博物館85 p.88〕。本例も，断片ではあるが9～10世紀代の優品といえよう。

I 76は須恵器片口鉢。底部から直線的に立ち上がる器形で，口縁端部はしっかりと面取りする。底部の糸切り痕は撫で消されている。青灰色を呈する東播系の須恵器であるが，定型化した大形のすり鉢ではなく，碗の大ぶりのものに片口を付けた器形ともいえる。森田稔によれば，上下に拡張しない口縁端部の形状は東播系すり鉢でも古い段階の特徴であり，12世紀中葉に比定できる〔森田86〕。出土したのは13世紀中葉の土坑 SK22 である。

5 中世の遺跡

(1) 遺 構 (図版 2～5, 図 1・11)

おおむね茶褐色土を埋土としており、今回の調査で確認された遺構の中心となる。出土遺物の時期からみて、遺構には以下の 3 つの年代的まとまりがある。

I : 1 段撫で面取り手法を中心とするが、2 段撫で素縁手法の土師器皿も若干ともなう段階。中世京都 I 期古段階に相当し、12 世紀末～13 世紀前葉の年代が与えられる。

II : 土師器皿の手法が 1 段撫で面取り手法を中心とし、灰白色の碗が出現している段階。中世京都 I 期中段階に相当し、13 世紀中葉の年代が与えられる。本調査区の中世の遺構のうちでも主体を占める。

III : 灰白色の凹み底小碗が盛行する段階。中世京都 II 期中段階におおむね相当し、14 世紀中葉の年代が与えられる。

ここでは、それぞれ本調査地における「中世 I 期」「中世 II 期」「中世 III 期」と呼ぶことにし、以下の遺構・遺物の説明にはこの時期名称を用いる。こうした年代的まとまりは、西側の AT29 区の調査においてもおおむね認められているものである。なお、遺構は北調査区の北半と南調査区の南半に偏る傾向があり、相互に性格も異なっていることから、調査区ごとに説明する。

北調査区の遺構 真北から東へ 10° 前後方位を振る溝群と、不定形土坑を中心とする。

東西方向の溝 SD5 は規模・形状とも最もしっかりしたもので、検出面で幅 2.4 m、深さ 1 m を測り、断面は逆台形を呈する。上層には拳大～人頭大の礫がまとまって集石状を成している部分が見られた (図版 2-3)。中世 II 期の遺物が出土している。この SD5 に並行して、幅 60 cm 程度の浅い溝 SD12 のほか、幅 30 cm 程度の複数の小溝がはしっている状況も確認された。しかし、多くを攪乱に破壊されており、直交する南北方向の小溝 SD10 も含めて、時期を特定できる遺物は出土しなかった。小溝群の埋土は SD5 と異なる暗茶褐色の色調を呈しており、また切り合い関係から SD10 は SD5 に先行することがわかる。こうした状況から、これら小溝群は、SD5 に先行する中世 I 期以前のものとみられる。SD5 を中心としたラインは、北側の砂取り穴と南側の遺構の空白地帯とを隔てており、中世における土地利用の境界線として重要な意味をもつものだろう。

調査区中央付近は遺構の密度が低く、その南側は攪乱のため遺構の残りが悪かった。南北方向の溝 SD3・SD13、東西方向の溝 SD14 は、いずれも幅 1 m、深さ 30 cm 前後のもの

中世の遺跡

で、中世Ⅱ期の遺物がわずかに出土している。また、X=1650付近の西壁際では、直角に曲がる溝SD9をはじめ、幅20cm程度の小溝が集中していた。茶褐色土を埋土としており、中世の溝とみられる。攪乱のため全体の形状は不明だが、この西側では遺構の密度が高くなっている可能性を示しており、注意される。このほかに、中世Ⅱ期の土師器数個体がまとまって出土した小規模な土器溜SX1・SX9がみつまっている。

調査区北辺の不定形土坑SX2・SX6～SX8は、深さ2mを越える連続したひと続きの遺構で、下層の白色砂を採取した砂取り穴である。最も新しい時期の出土遺物に灰白色の凹み底小碗があり、中世Ⅲ期の遺構とみられる。SX2は掘り上げると南北方向の濠状になるが、SX6～SX8は壁面のオーバーハングが著しく、人間1人が掘削作業をするのに適当な、直径1.5～2m程度のふくらみが連続した凹凸の著しい輪郭をもつ。相互の切り合い関係は確認できなかったが、SX2の南北断面でみると、南から北へ傾斜して白色砂と茶褐色土が互層に堆積しており（図版3-2）、SX2を掘り上げたのち、南側のSX6～SX8を掘りながらこれを埋め戻していった可能性が考えられる。また、SX6の上面の一部は集石状を呈していた。埋め戻しの過程で礫を集中して投棄したのであろう。

南調査区の遺構 溝、土坑、土器溜、集石、多数の柱穴がある。

溝SD19は、調査区の南端に位置する、東西方向の浅い溝である。幅はおおよそ1mを測る。東西両端は攪乱で切られており、長さは不明であるが、西側に隣接するAT29区の調査では、延長部となる溝は検出されておらず、西へは続かないと思われる。方位は真北から約10°東へ振る。これは、前述した古代の溝群や北調査区の溝群が示す方位と合致しており、また、古代の溝群とは、位置も近接していることは注目される。土師器を中心に出土した遺物から、中世Ⅰ期に属する遺構とみなされる。

SK24とSK28は、小規模な土坑であり、掘形底部に根石をとまうことから、柱穴と考えられる。根石の最大径はともに約60cmを測る。前者の根石の上面は平らであり、後者は丸みのある花崗岩である（図版5-5）。茶褐色土を埋土とし、土師器小片のほか、後者からは軒瓦（I 232）が出土した。中世Ⅱ期の遺構と思われる。これらの柱穴の周辺からも、偏平で小さな根石をもち、同様に茶褐色土を埋土とする柱穴を十数個検出している（図1黒丸地点）。さらに、AT29区では、平瓦や石の礎盤をとまう柱穴をもった同時期の建物跡SB1とSB2を検出している。以上を考慮すると、現状では建物に復原できる柱穴のならばはないものの、本調査区西半部にも小規模な建物があった可能性が強い。

調査区の西辺中央には、土坑SK29がある。検出面からの深さは約2.2mを測るが、底

部の中心はさらに深く発掘区外にある。AT29 区では、発掘区の東壁際に濠状遺構 SK1 と SK2 を検出している。13世紀代前後の遺物を包含する層を掘り込んでいる点、埋土から出土する遺物が中世Ⅱ期に相当する点、相互の位置関係などから、今回の SK29 とこの濠状遺構は同一の遺構で、それぞれ東西の肩を検出したものと思われる。この遺構はその形状や断面からみて、本調査区と AT29 区の間の未調査部分に中心をもつ、井戸である可能性が高いだろう。

SK19 は、調査区の北端に位置する小規模な土坑である。遺物は、D₅ 類土師器皿のほか、大形の土師器の羽釜（I 194）が一括して出土している。埋納などの特殊な性格の遺構であった可能性もある。

SK32 と SK39 は、調査区の南端に位置する土坑である。ともに黄色砂を掘り込む遺構で、SK32 からは、礫をとまって瓦器の盤（I 195）が出土した。SK39 は、検出面での大きさが東西 3.5 m、南北 2.5 m を測る。遺物は、北端と西端に集中しており、それぞれ土器溜状を呈する。土師器のほかには、石硯（I 181）や石鍋（I 182）、鉄製の刀子（I 244）など多様な遺物が出土している。また、瓦器は中央部にまとまっていた。南を除く三方からは、鉄釘も出土している。ただし、墓坑と想定できるほど整った遺物の配置はみられない。

調査区の南半には、SX13～SX17、SX19 がある。すべて小規模の土器溜状の遺構で、掘り込みははっきりせず、茶褐色土中で確認した。それぞれ明確に範囲を限定できなかったが、ひとつづきの遺構である可能性もある。出土した遺物は、中世Ⅱ期に位置づけられる土師器を中心とするもので、いずれの遺構も少量の礫をとまっている（図版 5-4）。また、SX13 の下層では、小さな円形の土坑を検出したが、出土した土師器からみて、上層の遺構群と同時期と考えられる。SX19 を除くこれらの土器溜状遺構群と SK32 および SK39 は、先史時代の自然流路 SR1 埋積後の凹地内に位置している。凹地西方の高くて安定した地盤上には、建物跡や井戸と思われる遺構がまとまっており、この地での活動者たちが、廃棄または祭祀の場所として凹地を利用していたと推測できる。先史時代の地形環境が、中世における土地利用にも影響を及ぼしていたとみられ、興味深い。

集石遺構 SX11 は、調査区の西北隅に位置する。掘形検出面での南北長はおよそ 5.5 m を測るが、集石の南半は攪乱に破壊されていた。西端も発掘区外となり、東西幅も確定できないが、掘形底部の中心は発掘区内に収まり、西へはそれほど広がらないと思われる。石は拳大の礫を中心とするもので、上層部に集中するほか、特に南半部に密度が濃い（図 11、図版 5-3）。土師器、瓦、陶磁器などの小片が出土しており、中世Ⅱ期に比定できる。

中世の遺跡

SK48は、調査区のほぼ中央に位置する不定形土坑である。平面は楕円形を呈し、東西3.5m、南北2.2m、検出面からの深さは約2mを測る。下層の白色砂層を深く掘り込み、側壁はオーバーハングする。底部の壁際を中心とした部分から、完形の凹み底小碗がまとも出土しており、やや祭祀遺構的な性格もうかがわれる。中世Ⅲ期に比定される。この時期の遺構は、ほかに北調査区で一連の砂取穴遺構がある。SK48は、これらと比べて規模は小さいものの、オーバーハングした側壁、砂層と茶褐色土が互層に縞状となる埋土などの特徴の類似を指摘できる。しかしながら、位置的に孤立して存在していることから、砂取りの目的で穴を掘ったものの、何らかの理由で中断放置された可能性もあろう。

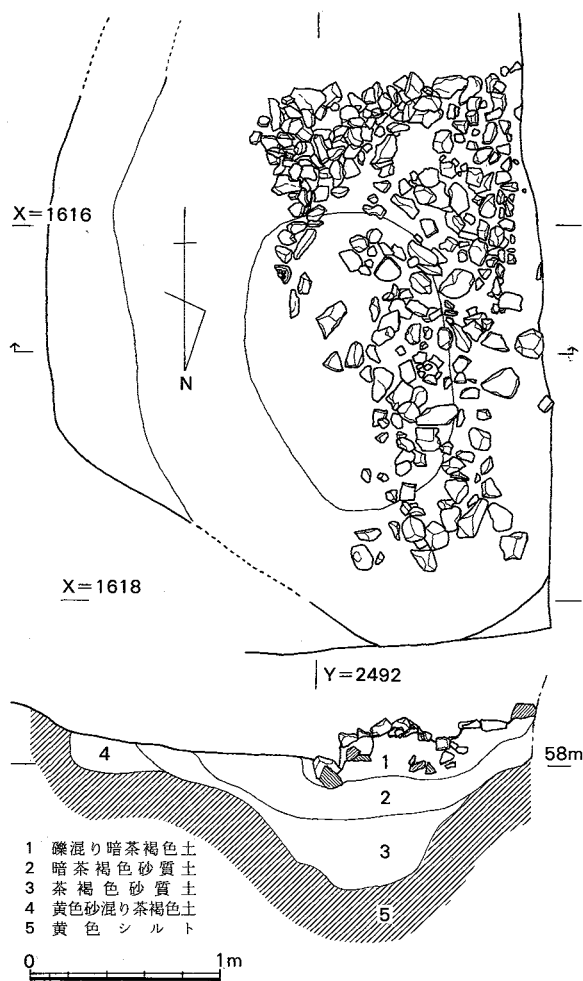


図11 集石 SX11 縮尺 1/40

(2) 遺物 (図版12・13, 図12~17)

遺物の種類では土師器皿類が圧倒的多数を占め、その多くは南調査区を中心に群在していた土器溜の出土品である。おおむね遺構の種類別に、遺物の内容を説明する。

SX1 出土遺物 (I 77~I 88) 土師器のみが出土した。赤褐色の皿で1段撫で面取り手法D₅類のもの (I 77~I 79・I 81~I 84) が主体で、E₁類 (I 80) や、灰白色の碗・皿類 (I 85~I 88) がともなう。中世Ⅱ期にまとまる資料である。

SX9 出土遺物 (I 89~I 92・I 239) 図示した土師器皿4個体と、鉄釘 (I 239) が出土している。I 89・I 91・I 92はD₅類、I 90はD₃類。

SX2・SX6～SX8 出土遺物（I 93～I 121・I 237・I 238・I 242） 不定形土坑の出土遺物。土坑の単位ごとに図示しているが、ひと続きの遺構であるためまとめて説明する。中世Ⅱ期の遺物を中心に、Ⅰ期とⅢ期の遺物が混じり、時期的にはまとまりがない。赤褐色の皿では、I 93・I 94・I 106～I 112のD₅類、I 96・I 98のE₃類があり、灰白色の碗ではI 97・I 113と凹み底小碗のI 99～I 101がある。I 102・I 103は瓦器鍋。I 102は口縁部が短く外折するもので、中世Ⅲ期に属する製品だろう。I 104は、見込みに櫛目文様を施す同安窯系青磁の皿。I 105は黄釉陶器盤。玉縁状に肥厚する口縁部で、内面のみ施釉される。I 116は土師器のミニチュア羽釜。I 117は須恵器すり鉢。口縁端部はわずかに上方へ肥厚する。東播系で、13世紀前葉ごろの製品である。I 118～I 121は白磁。I 118は大きな、I 119は小さな玉縁状をなす碗の口縁部。I 120・I 121は皿で、ともに見込みに圈線をもち、口縁を輪花で飾る。I 237・I 238は鉄釘、I 242は火打ち金。

SX13～SX17・SX19 出土遺物（I 122～I 163・I 235・I 243） 南調査区中央の狭い範囲で群在していた土器溜の遺物で、土師器皿類を中心にそれぞれ整理箱1箱分程度の出土量がある。同一時期の類似した性格の遺構群であることから、まとめて説明する。赤褐色の土師器皿は、口径が13 cm 前後と8～9 cm にまとまり、D₅類が主体となるが、小型の皿にはI 130・I 139のように素縁手法の粗雑な作りのものが若干混じる。灰白色を呈するものは量的に非常に少なく、固有の器形は碗（I 126・I 148）のみである。I 161・I 162も灰白色を呈するが、それぞれ赤褐色の皿や受皿と同一の器形・調整をもつものである。I 135は、瓦器の盤にみられるものと似た形状の三足をもつ小型鉢。黄褐色の明るい色調であるが、胎土や焼成具合は、土師器というより瓦器に近い。I 143は底部外面に回転糸切り痕を残す土師器皿。黄白色を呈する。I 136・I 153は須恵器片口鉢とすり鉢で、口縁端部をやや上方へ肥厚させるものである。I 145は須恵器甕。外面は横位・斜位の叩き調整するが、頸部のみ横撫でしてすり消している。これらの須恵器はいずれも東播系の製品であろう。I 137・I 144は瓦器鍋。I 163は瓦器羽釜。いずれも外面には煤の付着が著しい。I 156は白磁碗口縁で大きな玉縁状のもの。I 235は軒丸瓦。外区に珠文帯をもち、内区は左回りの巴文であろう。瓦当の内面は粗く撫で調整し、筒部の外面には縄目叩き痕、内面には細かな布目痕がみられる。I 243は鉄製の小刀。両端が欠けていて全形は不明であるが、20 cm を越えるものだろう。これらは、土師器の型式のまとまり具合から、本調査区での中世Ⅱ期の遺物の様相を最も良く示すものである。

SX11 出土遺物（I 164～I 167・I 234） 出土した遺物はいずれも小片である。I

164は白磁皿。厚手の器壁に全面施釉され、見込みには浅い圈線がめぐる。I 165は白磁碗の底部。見込みに圈線がめぐる。高台部分は露胎である。I 166は青白磁碗の底部。径の小さな凹み底で、底面は露胎している。I 167は青白磁の小型合子。I 234は、六葉複弁蓮華文の軒丸瓦。瓦当部分の下半のみが、集石に混じって出土した。やや磨滅している。

SK29 出土遺物 (I 168) 図化できたのはI 168の瓦器鍋のみである。同一の遺構と考えられるAT29区のSK1・SK2からは、中世Ⅱ期の多様な遺物が出土している。

SK39 出土遺物 (I 169～I 182・I 244) 整理箱1箱分の遺物があるが、他の遺構に較べて土師器以外のものが目立つ。赤褐色の土師器皿I 169～I 174はいずれもD₅類。I 175は灰白色を呈するD₃類。I 176は赤褐色の土師器受皿。I 177～I 180は瓦器。いずれも炭素の吸着が不十分で、灰色に近い色調を呈する。I 177・I 178の碗は口縁の端部内側にごく浅い沈線がめぐり、I 177は内面のみに、I 178は内外両面に密度の粗い暗文が認められる。I 179・I 180の皿は、内面のみに粗い暗文があり、I 180は見込みに崩れた鋸歯状の暗文がある。I 181は、滑石製の小形硯。径1cmの穿孔がみられ、携帯の利便を考えたか、あるいは^{おんじやく}温石や砥石への転用を試みたものかもしれない。I 182は滑石製の石鍋。外面には煤が厚く付着する。I 244は刀子。完存しており、全長14.7cm、刃渡り9.1cmを測る。

SK48 出土遺物 (I 183～I 193・I 233) 整理箱1箱分の土師器が出土している。赤褐色の皿はI 183・I 184の2点のみで、E₃類。残りはすべて灰白色の碗で、口径10～11cmのI 185・I 186、8～9cmのI 187・I 188、口径7～8cmの凹み底小碗I 189～I 193の3種がある。特に凹み底小碗は完形品で36個体を数えて全体の9割以上を占める。これらは、本調査区での中世Ⅲ期の一括資料として唯一まとまったものである。なお、I 233の巴文軒丸瓦は、SX19出土のI 235と同型式のもので、技法の特徴がほぼ一致している。中世Ⅱ期のものの混入であろう。

SK19・SK28・SK32 出土遺物 (I 194・I 195・I 232) 南調査区の小規模な土坑からは、D₅類を中心とする土師器皿のみが少量出土する場合がほとんどであり、共伴したそれ以外の資料を、ここで呈示しておく。

I 194は、SK19出土の土師器羽釜で、1/3程度残存している。内湾する口縁部をもつが、先端は強く横撫でされて短く上方へ立ち上がり気味になる。口径28.8cmを測り、色調は黄白色を呈する。胴部上半は撫でにより平滑にされているが、下半は内外面とも粗く刷毛調整されている。外面の鐳より下側のみに煤が付着している。13世紀代における土師器製釜の主産地である大和・和泉地域の製品とは明らかに器形・調整技法とも異なっており、

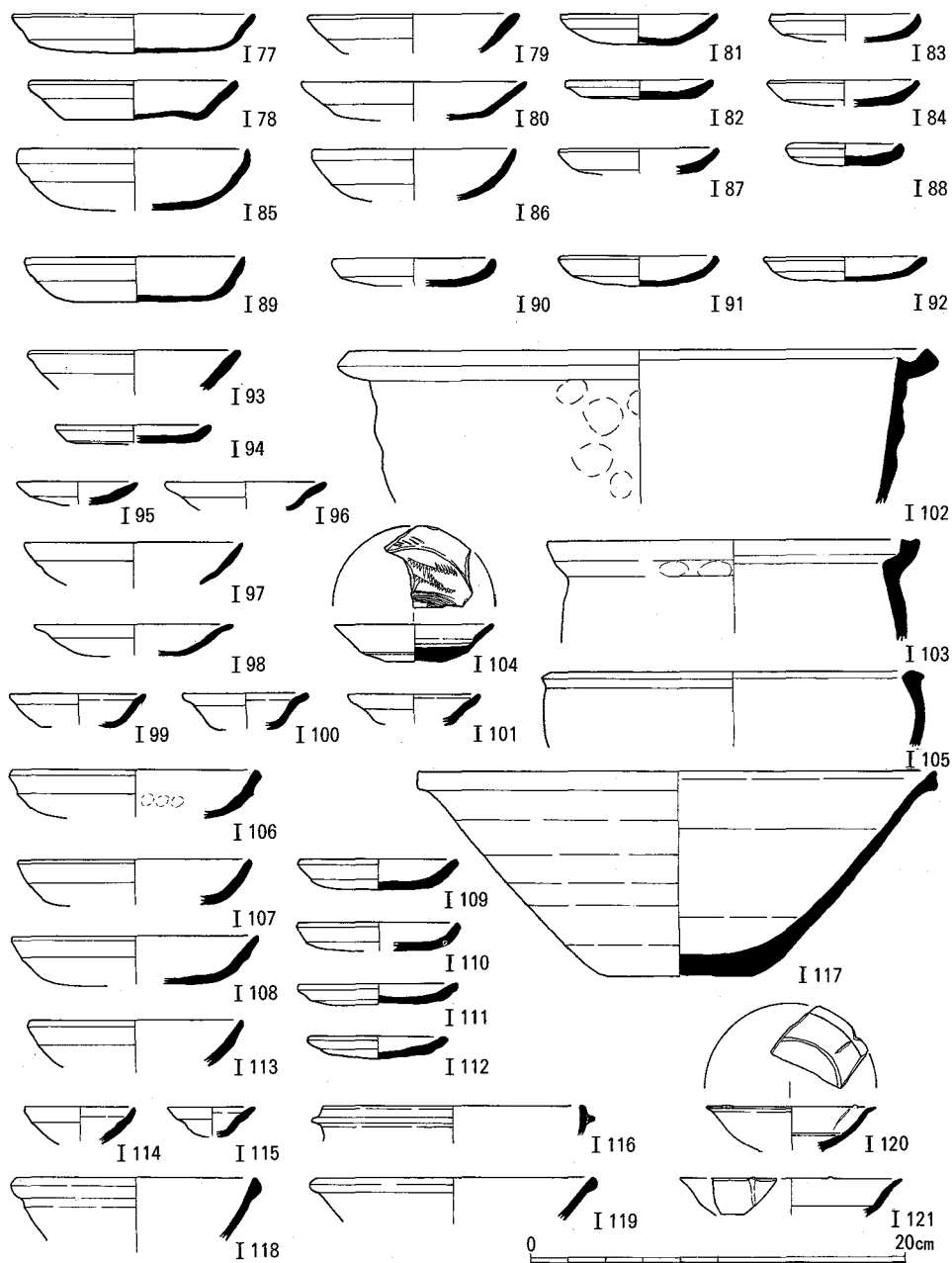


図12 SX1 出土遺物 (I 77～I 88土師器), SX9 出土遺物 (I 89～I 92土師器), SX2 出土遺物 (I 93～I 101土師器, I 102・I 103瓦器, I 104青磁, I 105黄釉陶器), SX6 出土遺物 (I 106～I 116土師器, I 117須恵器, I 118・I 119白磁), SX7 出土遺物 (I 120白磁), SX8 出土遺物 (I 121白磁)

中世の遺跡

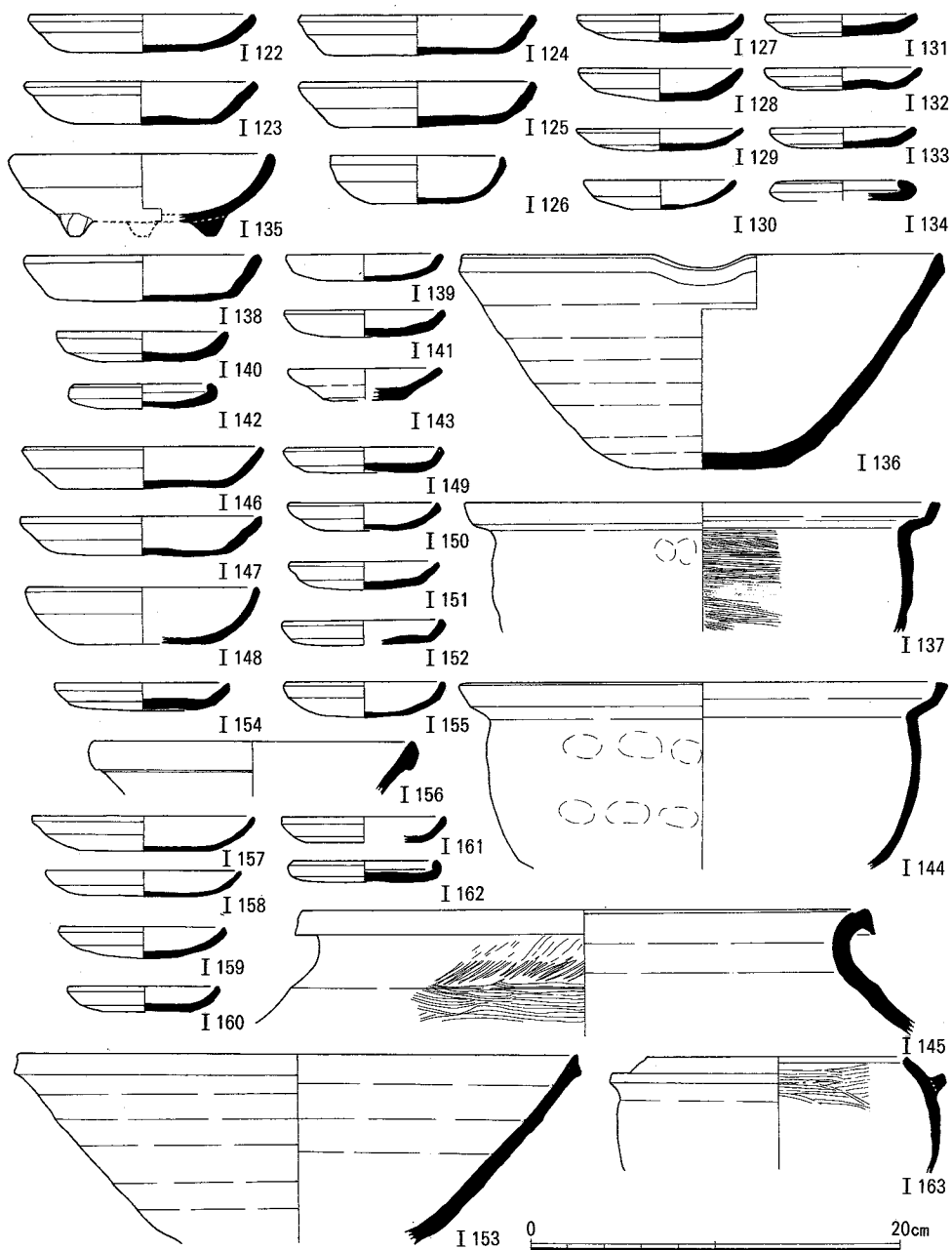


図13 SX13 出土遺物 (I 122～I 134土師器, I 135・I 137瓦器, I 136須恵器), SX14 出土遺物 (I 138～I 143土師器, I 144瓦器), SX15 出土遺物 (I 145須恵器), SX16 出土遺物 (I 146～I 152土師器, I 153須恵器), SX17 出土遺物 (I 154・I 155土師器, I 156白磁), SX19 出土遺物 (I 157～I 162土師器, I 163瓦器)

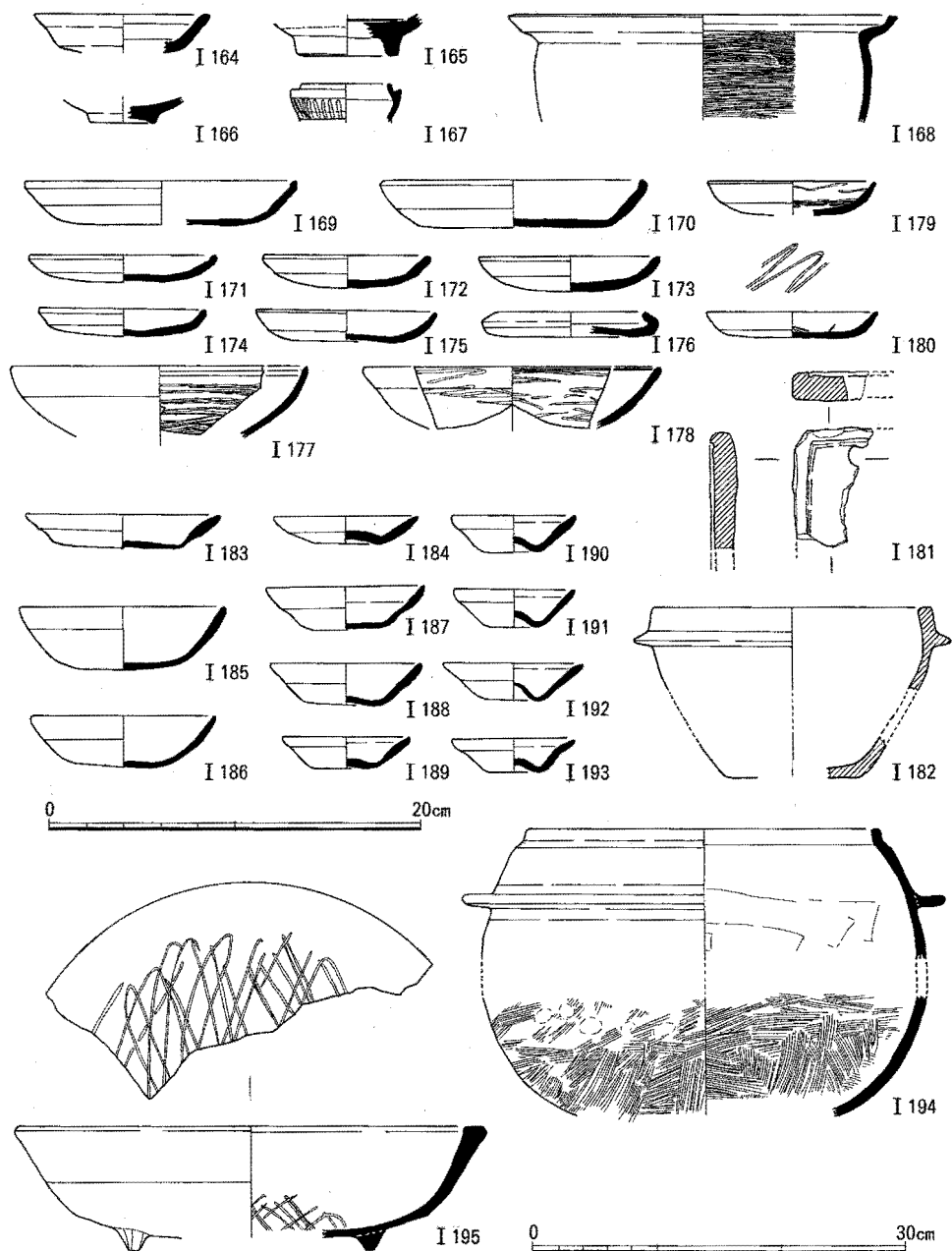


図14 SX11 出土遺物 (I 164・I 165白磁, I 166・I 167青白磁), SK29 出土遺物 (I 168瓦器), SK39 出土遺物 (I 169～I 176土師器, I 177～I 180瓦器, I 181石硯, I 182石鍋), SK48 出土遺物 (I 183～I 193土師器), SK19 出土遺物 (I 194土師器), SK32 出土遺物 (I 195瓦器) I 194・I 195 縮尺 1/6

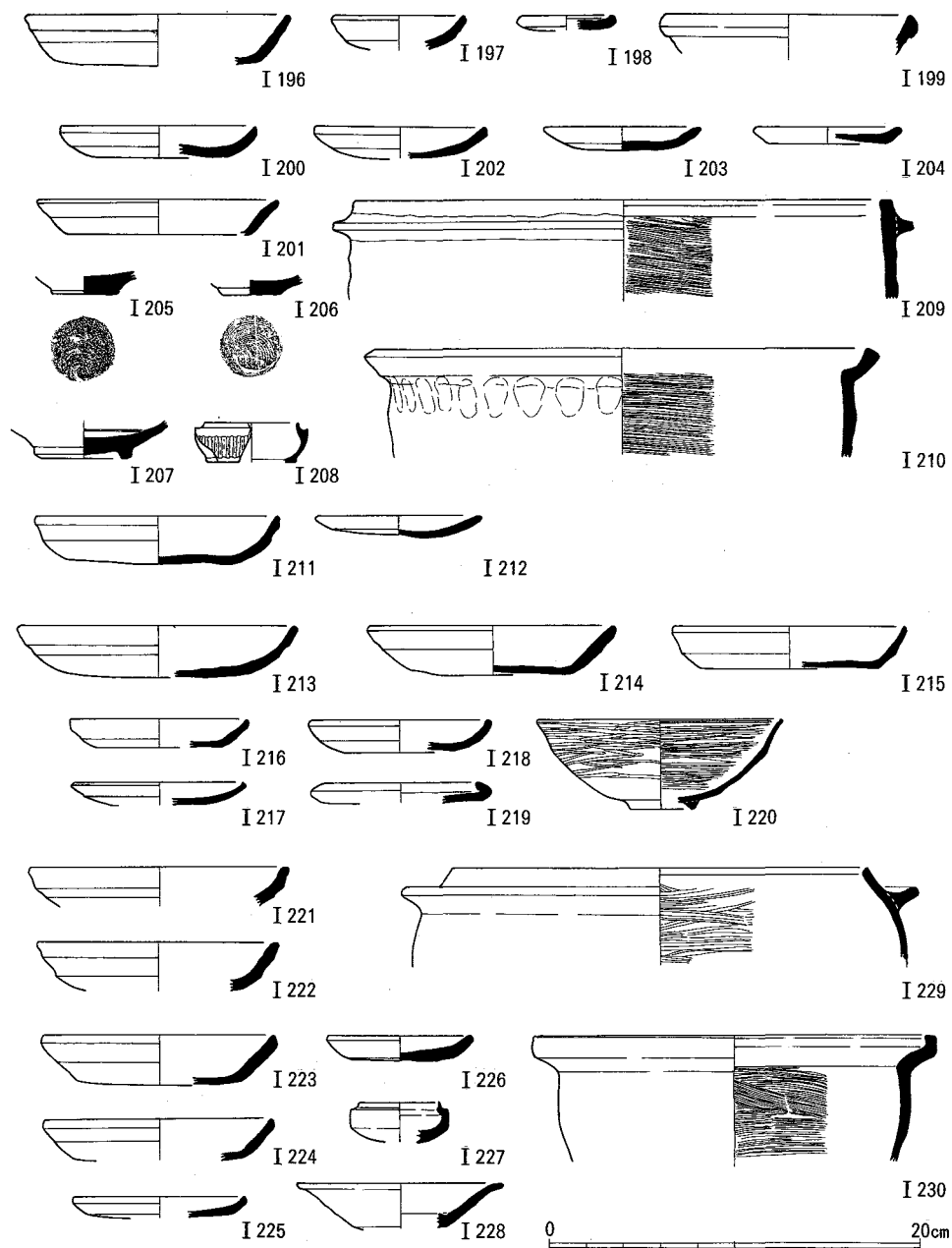


図15 SD3 出土遺物 (I 196・I 197土師器, I 198瓦器, I 199白磁), SD5 出土遺物 (I 200～I 206土師器, I 207・I 208白磁, I 209・I 210瓦器), SD14 出土遺物 (I 211・I 212土師器), SD19 出土遺物 (I 213～I 219土師器, I 220瓦器), 茶褐色土出土遺物 (I 221～I 225土師器, I 226灰釉系陶器, I 227青磁, I 228白磁, I 229・I 230瓦器)

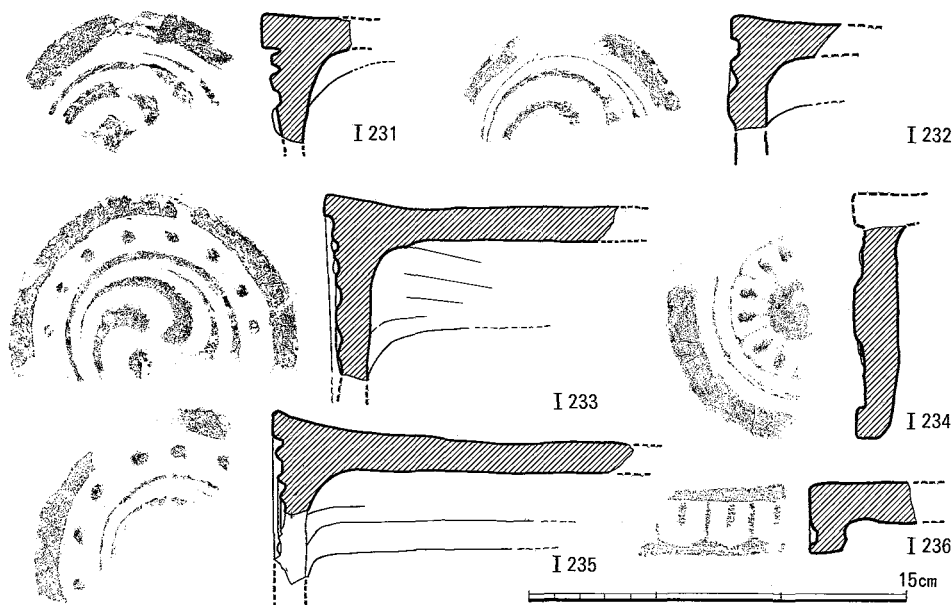


図16 軒丸瓦・軒平瓦 (I 231SD5, I 232 SK28, I 233 SK48, I 234 SX11, I 235 SX19, I 236 茶褐色土) 縮尺 1/3

菅原正明が近江型としているもの〔菅原89〕に近い。また森隆は、滋賀県野洲町北桜地区を生産地の候補に挙げて、内外面を粗く刷毛調整する土釜の変遷を指摘しており〔森隆86〕、本例は近江地域からの搬入品の可能性が高いとみられる。13世紀代に瓦器製の煮沸具を基本とする山城地域では、大和産の土釜以外の搬入は知られていないが、鴨東地域の特異性を示す事例かもしれない。今後類例の出土に注意する必要があるだろう。I 195はSK32出土の瓦器盤。1/4程度しか残存しておらず、三足か四足かは判別できない。口縁端部はしっかりと面をなし、内側へわずかに肥厚する。この端面と内面に細かな暗文が密に施されており、見込の暗文は斜格子状のモチーフを成す。I 232はSK28出土の軒丸瓦。左回りに細長く尾を引く巴文で、瓦当上半のみが残る。内面は撫で調整、筒部外面は縦位に削っている。

SD3 出土遺物 (I 196～I 199) 中世Ⅰ期～中世Ⅱ期の時期幅をもつ遺物が微量出土しており、まとまりがない。赤褐色の土師器皿では、I 196はC₃類、I 197はD₅類である。I 198は小型の瓦器受皿。I 199は大きな玉縁状をなす白磁碗の口縁である。

SD5 出土遺物 (I 200～I 210・I 231・I 241) I 200～I 204は土師器皿。I 201が灰白色を呈するほかは、赤褐色。I 200はD₄類、I 201・I 202はD₅類、I 203・I 204はD₃類。I 205・I 206は、灰白色の土師器で、回転糸切り痕を残す底部。I 207は白磁碗底部。

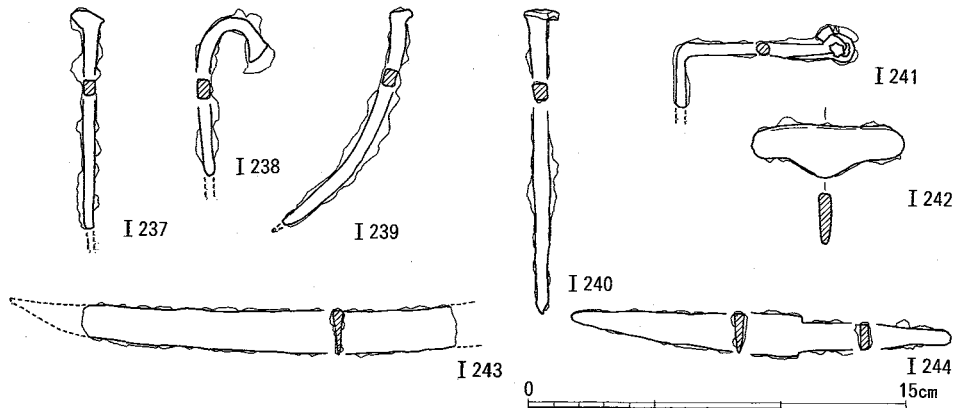


図17 鉄製品 (I 237・I 238・I 242 SX6, I 241 SD5, I 243 SX16, I 244 SK39, I 240茶褐色土) 縮尺 1/3

見込みに圈線をもち、高台内側は露胎。I 208は小型の白磁合子。口縁端部と底部外面は露胎。I 209・I 210は瓦器羽釜と鍋。I 231は左回りに尾を引く巴文軒丸瓦で、外区に珠文帯をもたない。I 241は掛け金の部分。以上は細片が多いが、中世Ⅱ期の資料であろう。

SD14 出土遺物 (I 211・I 212) 赤褐色の土師器皿大小1点ずつが、ほぼ完形で出土している。I 211はD₅類, I 212はD₃類。

SD19 出土遺物 (I 213～I 220) 整理箱1箱分の遺物が出土している。土師器はすべて赤褐色で、灰白色のものは無い。I 213・I 216はC₃類, I 214・I 215・I 217・I 218はD₅類, I 219は受皿。口径は, I 213が15 cmを越えるほか, 13～14 cmと9～10 cmでまとまる。これらは, 2段撫で手法が存在し, 法量もやや大きめであるなど, 土器溜出土資料に較べて古い特徴をもち, 本調査区での中世Ⅰ期のまとまった資料といえる。I 220の瓦器椀は, 外面上半と内面全面に密な暗文を施している。口唇部の内側に沈線をもち, 高台は断面三角形のしっかりしたものである。器壁は薄い, 焼成は堅緻で, 漆黒色を呈する。I 177・I 178に較べて明らかに丁寧な作りで, 古式の特徴を示しており, 土師器の様相の違いと対応する。橋本久和のいうⅡ-3に比定できる〔橋本80〕。

茶褐色土出土遺物 (I 221～I 230・I 236・I 240) I 221～I 225は赤褐色の土師器皿で, I 221・I 222がC₃類, I 223～I 225がD₅類。I 226は灰釉系陶器の小皿。底部には篋切り痕がそのまま残る。I 227は小型の青磁合子。I 228は白磁口禿の皿。I 229・I 230は瓦器の羽釜と鍋。いずれも外面には煤が厚く付着している。I 236は剣頭文軒平瓦。瓦当面に布目痕が残る。I 240は釘で, 完存しているものとみられ, 長さ12.0 cmを測る。

6 近世の遺跡

検出された近世の遺構には、井戸、野壺、溝などがあり、遺物は、土師器、陶磁器などが整理箱10箱出土した。これらの遺構と遺物は、江戸後期（18世紀後葉～19世紀前葉）と幕末（19世紀中葉）の2時期に大別できる。

(1) 江戸後期の遺構と遺物（図版5・14、図1・18～20）

溝 SD2 北調査区中央付近で、溝 SD2 を見出した。幅 0.5 m 前後で、一部を検出したにとどまる。方位を真北から約 18° 東へ振る。

I 245～I 262は SD2 出土遺物である。I 245は土師器皿。見込みに圈線がめぐる。I 246は轆轤^{ろくろ}成形の土師器デンプ。I 247～I 255は染付碗、I 256は染付筒形碗、I 257は染付半筒形碗である。I 247はコンニャク判で桐文を描く。I 248・I 249はくらわんか碗である。I 255は線描きで龍文をあらわす。I 258・I 259は染付皿。I 260は外面青磁釉の染付蓋である。見込みの五弁花をコンニャク判で描く。I 261は陶器灯明受皿。I 262は陶器蓋。

野 壺 北調査区で9基発見した。このうち、SE1・SE2・SE7は漆喰製で、残りの野壺は木製と考えられる。SE2・SE4・SE5は溝 SD1 にきられている。

I 263～I 271は SE2 出土遺物。I 263は土師器鉢。轆轤で成形しており、外面は磨いて仕上げ、褐色の粘土を主体に白色の粘土を練り合わせて生地としている（図の黒塗り部分が白色粘土）。I 264～I 268は染付碗。I 264はくらわんか碗、I 267は焼継の痕跡が残る。I 269は半筒形碗。I 270は染付蓋。I 271は陶器蓋。

I 272は SE8 出土の染付皿。見込みに五弁花をコンニャク判であらわす。底裏に崩れた「大明年製」の銘をもつ。I 275～I 277は SE7 出土遺物。I 275は見込みに圈線がめぐる土師器皿。I 276は外面に青磁釉のかかる青磁染付蓋。I 277は半筒形碗。底面は蛇の目釉剥ぎである。

土 坑 北調査区中央付近で発見した土坑 SX5 は浅いすり鉢状で、底面 50 cm 四方ほどの範囲に小礫が敷き詰めてあった。I 273・I 274は SX5 出土遺物で、I 273は焙^{ほうらく}烙、I 274は染付碗である。

SX12 は南調査区東辺中央で発見した土坑で、埋土に礫が混じる。I 325～I 328は SX12 出土遺物。I 325・I 326は土師器皿。I 325は口縁部に煤が付着する。I 326は見込みに圈線がめぐる。I 327は土師器デンプ。I 328は陶器鉢。高台は無釉で、見込みは蛇の目釉剥ぎするが、不完全なため熔着痕が残る。内面、刷毛塗りで波状文様を描く。

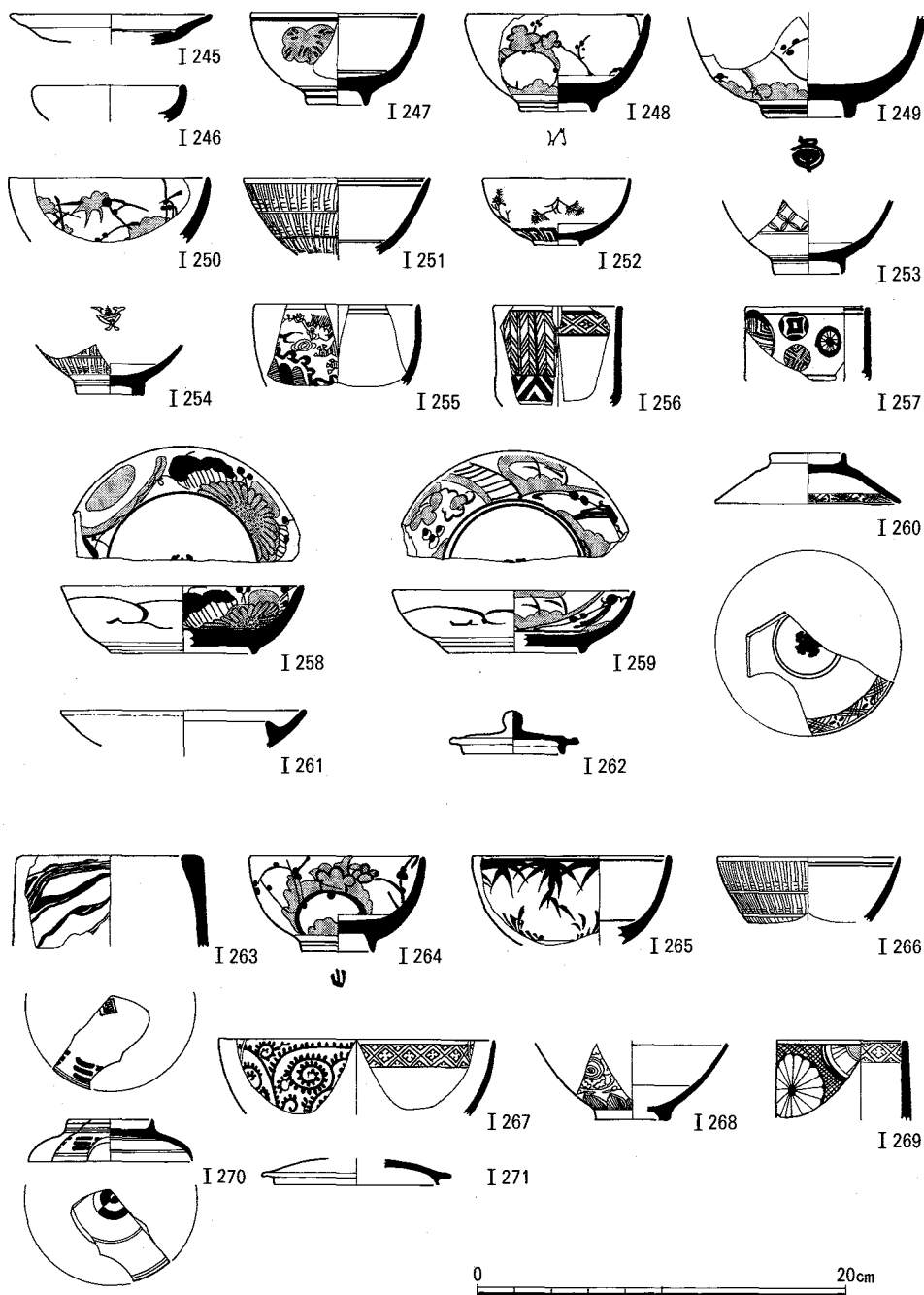


図18 SD2 出土遺物 (I 245・I 246土師器, I 247～I 260染付, I 261・I 262陶器), SE2出土遺物 (I 263土師器, I 264～I 270染付, I 271陶器)

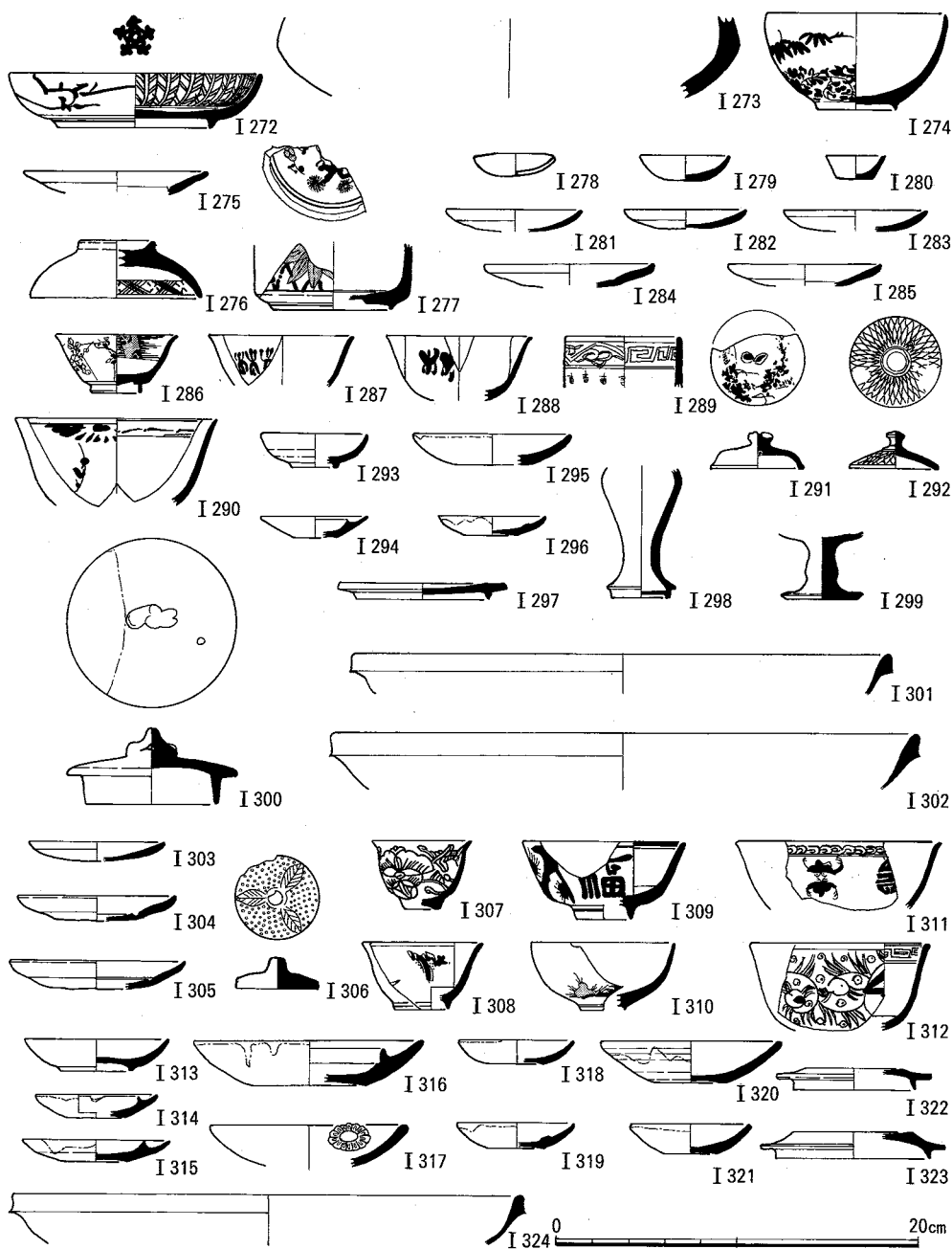


図19 SE8出土遺物 (I 272染付), SX5出土遺物 (I 273土師器, I 274染付), SE7出土遺物 (I 275土師器, I 276・I 277染付), SD1出土遺物 (I 278～I 285・I 301・I 302土師器, I 286～I 292染付, I 293～I 300陶器), 灰褐色土出土遺物 (I 303～I 306・I 324土師器, I 307～I 312染付, I 313～I 323陶器)

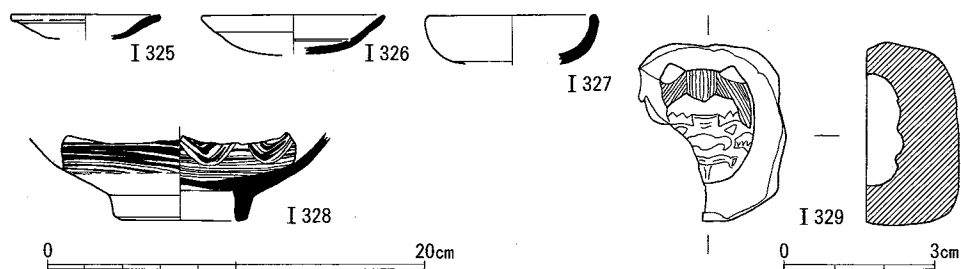


図20 SX12 出土遺物 (I 325～I 327土師器, I 328陶器), SD1 出土遺物 (I 329) I 329 縮尺 1/1

(2) 幕末の遺構と遺物 (図版14, 図1・19・20)

溝 SD1 北調査区北半で検出した。南北方向に延び、幅約 6 m、検出面からの深さ 0.2～0.4 m を測る。北側は調査区外へと続いており、南側は次第に浅くなり X=1665 付近で消えているが、これは近代に削平を受けたためであろう。方位を真北から東へ約 10° 振っている。

I 278～I 302・I 329はSD1 出土遺物である。I 278・I 279は型作りの土師器小皿で、内面に離型材の雲母が付着する。I 280は^{ひいそく}乗燭であろう。内面中央に、芯立ての剝離痕がある。I 281～I 285は土師器皿。I 284・I 285は見込みに浅い圈線がめぐる。I 284は口縁端部に煤が付着し、灯明皿として用いられたことがわかる。I 286～I 290は染付碗で、I 286～I 288・I 290は口縁部が端反りとなる。I 286・I 289は体部外面に鐮状の面取りを施している。I 291・I 292は染付蓋。I 293は陶器皿。I 294は陶器灯明受皿。I 295・I 296は陶器灯明皿。I 297は陶器向付の蓋。I 298は陶器仏花瓶。I 299は陶器仏飯。I 300は陶器土瓶の蓋。I 301・I 302は焙烙。体部外面に、離型材の砂が付着する。I 329は土製の抜き型である。鬼の顔を表現している。裏面に墨書文字が2文字見えるが、判読できない。

以上説明した遺構以外から出土している近世の遺物について、説明を加えておく。I 303～I 324は北調査区の灰褐色土出土遺物。I 303～I 305は土師器皿。いずれも口縁部に煤が付着し、灯明皿として使用される。I 306は土師器壺の蓋。I 307・I 308は染付小杯。I 309～I 312は染付碗。I 311・I 312は口縁端反りである。I 313は陶器皿で、皿付けを除いて全面に灰緑色の釉がかかる。I 314～I 316は陶器灯明受皿。I 317～I 321は陶器灯明皿。I 317は口縁部内面に、型作りで菊花をかたどった瘤を貼り付ける。瘤に対応する位置の口縁部外面には煤が付着し、瘤が灯心を立てる装置であったことがわかる。I 322・I 323は陶器向付の蓋。I 324は焙烙。これらの包含層出土遺物の年代は、江戸後期から幕末までにおさまるものと思われる。

7 小 結

(1) 弥生時代前期の遺跡と遺物について

遺 跡 これまで縄文～弥生時代の遺構や遺物に関する情報が希薄であった本部構内で、はじめてまとまった資料が出土したことになり、多くの貴重な知見を得ることになった。1979年度の試掘調査の結果で予想されていた通り、包含層のひろがり調査区東半の一部分に限られていたが、それが流路内の底面に沿ってU字状に堆積するものであったことを新たに確認できたのは大きな成果といえる。また従来、弥生前期末～中期初頭の一時期の土石流堆積層とされる無遺物の黄色砂層は、北部構内から総合人間学部構内にかけてひろく堆積するものとみなされてきたけれども〔清水91〕、今回の調査では、流路内のみ堆積してそれを埋没させる状況であった。以上から、弥生前期以前の地形がかなりの起伏をもっていたことが知られるとともに、遺物包含層や黄色砂層もその影響をうけて、流路内や凹地などかなり局地的に堆積していることが具体的に明らかとなった。

流路よりも西側では、縄文時代以前に堆積した黄色シルト層の上面に直接古代以降の遺構が形成されており、黄色砂層や黒褐色土層の堆積をみていない。しかしながら、こうした旧地形のレベルの高い地点については、本来的には黄色砂層やその下の先史時代遺物包含層も存在しており、後世に削平されて消失してしまっていたり、黄色砂層が介在しないで歴史時代遺物包含層と先史時代遺物包含層とが直接重なって堆積している可能性も、考慮しておく必要がある。本部構内中央付近ではそうした状況が確認されており（第4章参照）、またこれまで本部構内において、散発的ではあるが縄文～弥生時代遺物が確認されてきているのも、同様な理由によるものと思われる。一方で、調査地以東・以南については、吉田山側より複数の流路が流入している状況がみられ、かなりの地形の起伏と局地的な遺物包含層の存在が推測される。いずれも、今後の調査にあたり注意する必要があるとともに、地形環境の復原にあたっては既存の成果も再検討する必要がある。

突帯文土器と遠賀川式土器 流路から出土した遺物の内容については第3節で詳述したが、ここでは突帯文土器と遠賀川式土器の編年と系譜を中心に簡単に検討を加えておく。

出土土器は、口縁部や底部及び有文部分で図示可能なものはほぼすべて呈示している。種類を決めがたい無文の土器片については除外しているため、厳密なものではないが、同一個体の同定を経た上での内訳は、遠賀川式土器は40点で、うち壺10・鉢3・蓋2・甕17・底部8点（底部の内訳は壺4・甕2・不明2点）、それ以外の土器は突帯文土器を中心

に14点（深鉢2・無頸壺1・底部7・器種不明胴部4）で総計54点となる。取り上げ点数446点に対してかなり少なくなっているのは、互いに接合関係にあったり、同一個体と認定できるものがかなりの多数にのぼることによる。この状況の一端は（図3）に表示しているが、土器の磨滅が全くみられないことともあわせて、近い場所から短期間にまとめて廃棄された可能性を強く示すものと判断している。その場合、縄文土器型式の最末に位置づけられている突帯文土器と弥生前期遠賀川式土器との共存関係が、問題となろう。

遠賀川式土器については、器形の全体をうかがえる例に乏しいものの、壺・甕ともに篋描沈線による装飾は、確認できる範囲で3条を越えるものは無い。壺には、I5のように頸部の削り出し突帯に沈線を付加した例や、I7のように貼付突帯と胴部の沈線文带上側を段により低める装飾を併用している例がある。甕は、頸部に0条～3条までの沈線が確認できるもので、それ以外の装飾は認められない。以上は、これまでの編年観〔佐原67〕に照らすと前期中段階の土器の特徴を中心としながら、その中に貼付突帯の使用など新段階の指標とされた特徴を一部に含むものと言える。また、把手付の大形鉢I14や蓋形土器I10・I11の存在も、遠賀川式土器の中では比較的新しい段階の特徴である。ただし、貼付突帯の使用は、複数条が文様帯を形成する新段階に特徴的な装飾手法とは異なっていること、さらに、多条化した沈線文帯が全く認められないという状況も考慮すると、今回の資料は前期中段階のもので、なかでもより新相に位置する一群と位置づけるのが最も妥当であろう。周辺の資料群との比較では、多数の突帯文土器に混じって出土した高倉宮下層遺跡の遠賀川式土器は、段を成形するものが目立ち、明らかに先行する様相をもつ〔南88〕。下鳥羽遺跡平成5年度SD1〔京都市文観局94〕、内膳町遺跡SK601は〔石井89〕、類似の様相を示す資料であるが、突帯文土器は含んでいない。

突帯文土器については、突帯のあり方と外面調整の特異さが注意される。I32・I33は、ともに口縁～胴部半ばまでは残存しており、1条突帯の深鉢と判断できる。今回の出土資料中には、胴部破片も含めてほかに突帯の存在を確認できるものは存在しない。器形や突帯の特徴は最末型式の長原式の範疇に含まれるものでありながら〔家根82〕、一般に2条刻目突帯文深鉢が主体となっている長原式のあり方とは傾向を違えている。また、外面の上半部をなで、下半部を削り調整することを基本とする長原式の調整手法をとるものは少なく、条痕状あるいは篋磨き状の調整によるものが非常に目立つ。I36～I38の底部は、原体に板状工具を用いていると想定されるものの、突帯文土器の調整には類例を見ない粗いものであり、縦位方向を基調とする粗い篋磨き状の調整で一気に仕上げるI32も珍

しい。鴨川・宇治川以東の後半期の突帯文土器には、外面調整の手法が多様化するという地域的特徴が指摘されており〔中村健90〕、今回はその特徴を追認することになったけれども、これほど変容した事例は認められない。いずれにせよこれらは、共存関係にある遠賀川式土器からみて明らかに従来知られている長原式よりも時期の下るものと判断される。山城地域における最末期の突帯文土器が、従来からの傾向であった外面仕上げにみられる地域色をより顕在化させ、長原式の中では少数派であった1条突帯文深鉢を残存させる方向性で消滅に向かったことを示唆する内容ともみられるが、周辺の出土事例も含めてさらに検討を加え、機会を改めて結論づけることにしたい。

(2) 古代～中世における吉田山西麓の土地利用の変遷 (図21)

古代以降の状況については、本部構内東半を中心とする従来の成果とあわせてまとめ、吉田山西麓における変遷を時代別にたどることにしたい。

奈良時代以前 6～7世紀代の甕の埋納土坑が168・214地点で、8世紀中葉ごろの竪穴住居2棟が75地点でみつまっている。

甕の埋納土坑は、168地点のSK2が土師器長胴甕2個体を円形土坑に、214地点のSX4は、不整楕円形の土坑に土師器球胴甕を逆位に納めたものである。7世紀前半に営まれた山科区旭山古墳群では、E-3号墳小石室や方形土坑SK1に土師器長胴甕が埋置され、棺としての利用が推定されている〔京都市埋文研81〕。このように7世紀ごろには土師器甕を棺や骨蔵器として利用する習慣が存在していたとみられ、本部構内の例も、埋葬にかかわる遺構の可能性が高い。168地点の北方200mには、横穴式石室を内部主体にもつ古墳後期の円墳2基が追分町古墳群として記録されているほか〔京都市文観局86〕、総合人間学部構内における5～6世紀代の方形墳の群在も考慮すると〔五十川・飛野84〕、吉田山の西～北麓一帯は、7世紀代以前には古墳を含む形での葬地であったと想定される。

一方、8世紀代の遺構は75地点の竪穴住居2棟より北側では確認されておらず、今回は遺物の出土もみしていない。南方の総合人間学部構内から医学部および病院構内一帯にかけてはこの時期の遺構がしばしば確認されることから、本部構内南端が当時の活動域の北縁にあたるのだろう。古代豪族栗田氏の領域に属していた可能性が高いが、小規模な遺構が散発的にみつかるとの現状であり、性格の解明には至らない。

平安時代 奈良時代までと同様に、資料は極めて乏しい。第2節でも述べたように、この時代の包含層は凹地や遺構の埋土としてのみ存在していたことから、中世以降の開発によって削平されている可能性はあるものの、北部構内や総合人間学部構内にくらべて圧

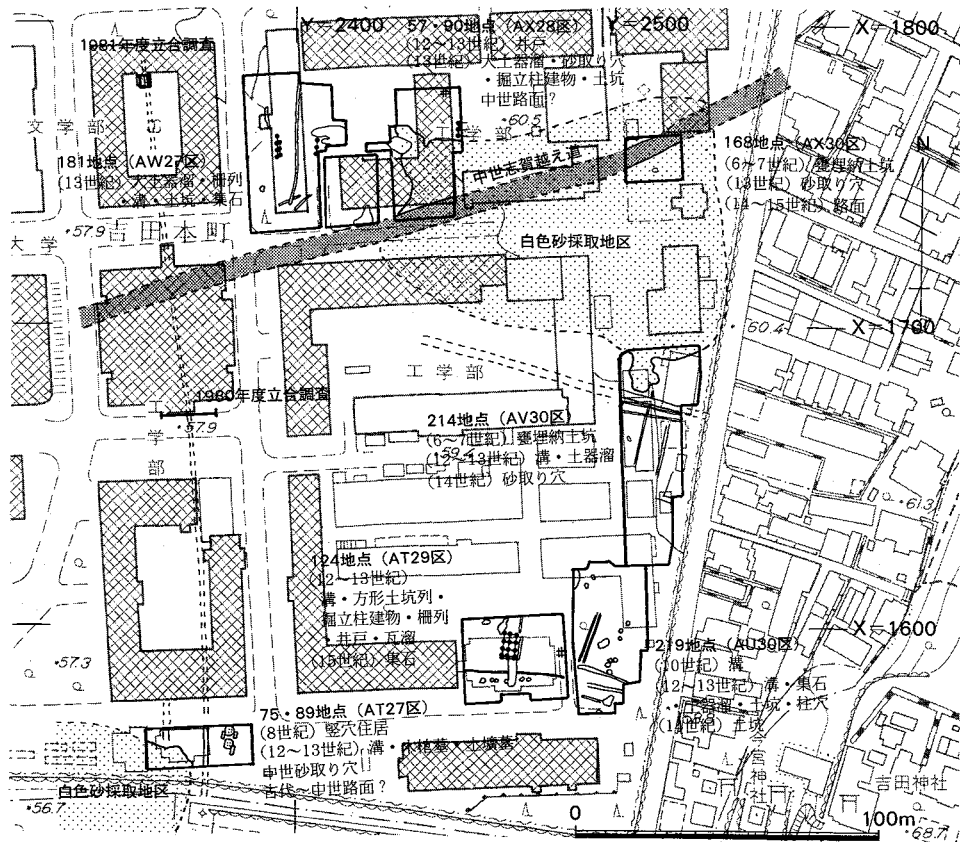


図21 本部構内東半の主要な古代～中世遺構 縮尺 1/2500

倒的に遺構・遺物とも希薄である。平安京遷都後には、後の志賀越え道に相当する道路が通されたと考えられるが、存在を確認できていない。本部構内の位置する吉田山西麓は、神楽岡墓地や付随する吉田寺との関連が推測される北麓一帯、および梵鐘製造関連の活動が行われていた西南麓という、南北2つの活動地の中間にあたり、平安時代においては未だ十分には開発が及ばない場であったかと推測される。今回みつかった10世紀ごろの遺構である南北溝 SD20・SD21 や東西溝 SD18・SD22 は、本部構内でも東南隅には幾ばくかの活動が成されたことを知る貴重な成果である。これら溝群はいずれも小規模で、方位を大きく東へ振る。建物関連というよりは、土地の区割りを示すものとみられる。この方位の振れは、弥生時代の流路 SR1 の方向におおむね一致するとともに、中世以降現代にいたるまで吉田山西麓の地割りに名残りをとどめており、地形に規定された土地区画が平安中期以降施行されてきたことを示す興味深い事例といえる。また、東方 100 m の山上に現在

の社殿を構える吉田社は、9世紀後葉に創建の伝承をもつことから、山麓にあったとされる旧社地との関連も注意される。

鎌倉・室町時代 吉田山西麓全域が活動の対象となってくるのは、おおむね12世紀後葉以降であり、以後13～14世紀代を中心に、各地点で大量の遺構・遺物が確認されている。これらは、その性格から、居住関連（掘立柱建物・井戸など）、廃棄と祭祀関連（土坑・集石・土器溜など）、埋葬関連（土壙墓・木棺墓など）、生産関連（砂取り穴）、に大別され、これに土地区画を示すとみられる溝や中世の志賀越え道の推定ルートを加えると、おおむね性格ごとにまとまった空間的配置を想定することができる。

生産関連遺構の中心である白色砂を大規模に採取した穴は、本部構内北東部分と南辺部分にその広がりを見る。前者は推定される中世の志賀越え道のルート周辺を中心とし、採取した砂の運搬の便宜を図る上で極めて合理的な立地である。後者についても、75地点で、黒色土の堅く締まった面が南北方向に認められ、鎌倉期以前に比定されていることから、道路に近接した立地であった可能性が高い。いずれも細かな時期比定は困難であるが、13世紀中葉の遺構に切られている例があり、一方168地点で砂取り穴埋没後に15世紀代の志賀越え道の路面が形成されていることから、13～14世紀を通じて継続的に行われたものとみられる。これらは、214地点の東西溝 SD5 を越えて南へは広がらず、75地点の南北溝 SD3 を越えて東へは広がらない。両溝とも13世紀中葉には埋没しているものの、白色砂の採取がその範囲を守って続けられていることから、溝の示すラインが、中世における土地利用の重要な境界線であったことがわかる。

砂取り穴で破壊された部分もあるが、これ以外の遺構は、上記の2つの溝で囲まれた範囲と、中世の志賀越え道の北側一帯にまとまる。124地点・219地点での所見からは、建物や井戸など居住関連の施設の東側に接して土器溜や集石などの廃棄・祭祀関連の遺構が集中していた状況がみられ、さらに75地点での中世墓群が時期的に対応することから、西側に接して墓域を設けていたと推測される。溝と吉田山に囲まれたおおむね1町四方の範囲の内部に、居住・廃棄・埋葬のそれぞれが接しながらも場を分けて配置されていた状況ともいえよう。一方、中世の志賀越え道の北側一帯では、90地点・181地点で、大規模な土器溜や埋葬関連とみられる土坑と、その東側に接して建物跡や井戸が確認されている。ここでは砂取り穴も絡んで諸遺構がモザイク状を呈しており、現状では秩序だった配置が復原できない。構内南半とは性格の異なる空間であった可能性があり、遺構群の時間的変遷の把握ともあわせて、今後の比較検討を課題としておきたい。

吉田周辺に関しては、平安時代末期から鎌倉時代に、西園寺家の別邸である吉田泉殿をはじめとして、貴族の邸宅や関係する寺院がたびたび営まれたことが文献記事に散見され、また藤原北家勸修寺流の人々の所領でもあったとされる。目下のところこれらと直接結びつく成果はなく、この地の活動者は不明であるけれども、大規模な白砂の採取跡はこうした階層の嗜好がもたらした産物であり、中世前半における各種の遺構の急増とも密接に関係していたであろう。そして、15世紀後半以降の社会の混乱に対応して活動の痕跡がほぼ消滅し、吉田山西麓は急激に耕地化して近世に至っている。

(3) 近世吉田村復原図との対応 (図22)

近世の吉田村の状況については、18世紀前半の絵図をもとにした景観の復原が試みられており〔浜崎83b〕、ここでは今回の調査成果との対応をみておくことにしたい。

絵図による復原からは、この時期吉田山西麓の中腹に存在した東照宮へと至る道路が通じていたと想定されており、そのルートは、北調査区の中央付近にあたることが予想された。しかしながら、確実に路面と認定できる遺構は全く検出できなかった。北調査区の北半にまとまってみつかった野壺群が、おおむね東西方向に列を成す状況であったことや、その南側が遺構の空白地帯となっていることから、本来的には道路が存在していた可能性

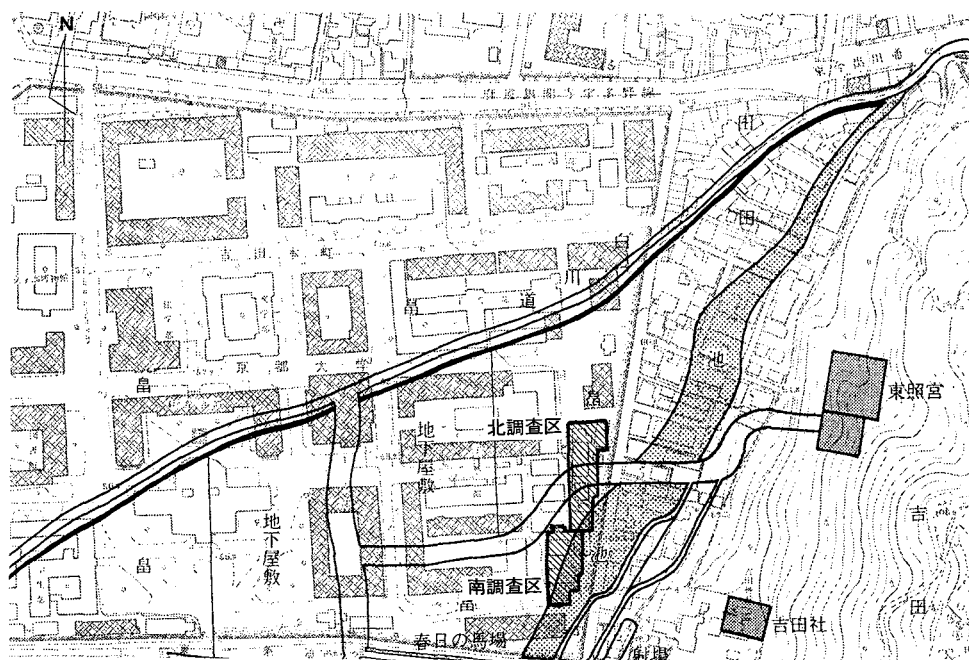


図22 近世吉田村の復原図と調査区の位置 縮尺 1/5000

もあり、今後の周辺の調査成果を待ちたい。

また、吉田山に沿う池の東縁が、南調査区に及ぶと予想されたが、特別な落ち込みや池に相当する状況は、確認できなかった。調査区の基本的な地勢は、弥生時代の流路SR1の埋積以後も西高東低の凹地状態で近世に至っていることから、絵図に描かれた池状のものも、こうした地勢を反映した、湿地や荒地程度のものを想定しておくのが妥当であろう。構内遺跡の近世遺構では無数に見いだされることが多い耕作関連の柱穴群が、ほとんどみられなかったという状況も、以上の想定を支持する。畑が広がっていたのは、より西方や北調査区の野壺群以北であっただろう。これら野壺群は、漆喰製と木桶製の双方が混在しており、近世後半以降ある程度継続的に営まれていたものとみられる。

このほか、南北溝 SD1・SD2 からは、それぞれまとまった遺物が出土したが、絵図にみる道路や池との対応関係を想定できる状況にはない。SD1 は、前述の野壺群を破壊して幅広く掘削されているもので、南方への続き具合ははっきりしないが、こうした切り合い関係と出土遺物から、少なくとも幕末期以降の時期が与えられる。文久2（1862）年における尾張藩邸の設置は、その東側にあたる調査地周辺の土地利用にも少なからず影響を与えたとみられ、こうした事情を反映する遺構であるかもしれない。一方SD2は、18世紀代にさかのぼる陶磁器類も多く含み、絵図に描かれた時期により近いことから、当時の状況に関連する遺構の可能性もあるが、断片的な検出にとどまり性格を判断できなかったのが惜しまれる。

なお、本報文の作成にあたっては、高倉宮下層遺跡の資料について南博史氏（京都文化博物館）に、緑釉陶器について高橋照彦氏（国立歴史民俗博物館）に、それぞれご教示いただいた。末尾ながら厚く御礼申し上げたい。